
インフィニット・ストラトス—仮初めの称号—

あるすトロメリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス―仮初めの称号―

【Nコード】

N1106W

【作者名】

あるすトロメリア

【あらすじ】

インフィニット・ストラトスの二次小説になります

主人公は英国出身のIS学園一年生。裏の顔は陰ながらセリアのボディガードをする諜報員。日夜激化するIS学園をめぐる影の戦いをくぐり抜けていく。学生なりに

01（前書き）

またも2chで思いついたネタ

この作品はarcadiaさんにも投稿させてもらっています。

インターホンを押すと、すぐに扉が開いて友人が顔を出した。

「ハイ、ヴェロニカ」

「こんにちは」

「にしても、日曜なのに制服？　IS学園の制服ってたしかに可愛いけど、日曜くらい楽にすれば？」

「ちょっと図書室に用事があったものですから」

「ふーん」

友人がラフな部屋着なのに対し、ヴェロニカの服装はIS学園の基本的な制服だった。IS学園の制服はそれぞれが好みでカスタムできるのが売りだが、ヴェロニカは目に見える改造は施していない。肩で切り揃えた黒髪にアイスブルーの瞳は自分では気に入っているが、学園の中では目立つものではない。背も低く成績もぱっとしないため、地味な生徒としてヴェロニカは通っている。

「ま、入ってよ。今日はセシリアいないし、気使わなくていいから」
「失礼します」

ヴェロニカは慣れた調子で友人のあとに続いた。IS学園の寮室はほとんど同じ造りになっている。せいぜい向きが違いか、建物の構造上いくつか特別な部屋があるくらいだ。誰の部屋も似たようなものとも言えるし、同じだからこそそれぞれの個性が見えるとも言える。だが、この部屋だけは別格だった。

「やはり、何度見ても壮観ですね」

「あはは、あたしはもう慣れたよ」

部屋の中には巨大な天蓋付きのベッドが設置されていたのだ。ベッドだけではない。クローゼットも、机も、証明も、壁紙も。すべての調度品が一流ホテルのスイートもかくやという品々で占められているのだ。寮のベッドもけして安物ではないのだが、この城のよくなベッドと並べられると簡素なものに見えてしまう。

「ま、ちょっと狭いけどその分あたしも高級な家具を使えたりするし、別にいいかって。セシリアもあれで面白い子だし。お茶っ葉なんかは勝手に使っちゃってるしね」

「私もそれが目当てで遊びにくるようなものですから」

「あ、ひどー」

話題の人物。この部屋の住人の片割れであるセシリア・オルコットは一年生ではちょっとした有名人だ。英国の代表候補生であり学内でも数少ない専用機持ち。これで注目されないはずはない。

「でも、ヴェロニカ。同じイギリス人なのに、あんまりヴェロニカはセシリアと話してるとこ見たことないよね」

「ん、んー……。英国人同士、というのもそれなりに気を使うんです。そっちだって、同郷ってだけでみんなと仲いい訳じゃあないでしょう？」

「そういうものかあ」

英国は階級社会である。同じ英国人、といってもヴェロニカとセシリア・オルコットではかなりの違いがあるのだ。学校ひとつとっても、セシリアが通っていたのは長い伝統を誇るパブリック・スクールで、ヴェロニカはちょっと特殊な公立学校に通っていた。そこで培ってきた価値観にもかなりの違いがある。セシリアとしては外国人と割り切れる相手と話しているほうが気が楽だろう。

それだけではない。セシリア・オルコットは上流階級の娘としては少し特殊な立ち位置にいる。セシリアの両親は事故で他界しており、彼女は若くして莫大な遺産とオルコット家という伝統を一身に背負っているのだ。このIS学園にやってきたのも家と財産を守るためだった。両親の死後、セシリアのもとには金と権威目当ての人間が大勢つめかけたという。IS学園でも、英国出身の生徒たちがセシリアに近づこうとするのをヴェロニカは見たことがある。

他にもあるが、ヴェロニカがセシリアと距離を置いているのはこういう理由からだ。無論、わざわざ言うことでもないので黙っている。

「あ、忘れてた。お茶入れるね」

「はい。お願いします」

しばらく談笑したあとに、友人がそういった。ヴェロニカが持ってきた菓子でこの部屋のお茶を飲むのが二人のいつものパターンだった。

友人が席をたった瞬間、ヴェロニカは自分のISを起動させた。

(起きろ、ゴールデン・アイG・E)

ヴェロニカの専用機『ゴールデン・アイ』が展開される。頭部の周囲にのみ限定展開されたG・Eが周囲の情報を貪欲にかき集めていく。

(……机の下に2つ。照明の中に1つ。ペンに仕込まれたものが1つ)

“虫”の位置を確認するとすぐにISを待機状態に戻す。G・Eは普段は腕時計になってヴェロニカの左手に待機している。

「ヴェロニカー、たまにはレモンティーにしてみない？」

「おまかせしますー」

「はいはい」

友人の声を聞きつつ、ヴェロニカは照明、机の下へと手を伸ばしていく。そこに設置されていたものを素早く取り除く。ヴェロニカの手の中に握られていたのは小型の盗聴器である。英国の次世代機的能力を少しでも盗もうという間諜の仕掛けたものだ。虫、というスラングが似合うほどに取っても取っても湧いてくる。ハンカチに包んでポケットに放り込むと、最後に机の上にあるボールペンを手に取る。この中に盗聴器が仕込まれているようだった。

(これは……壊すわけにはいきませんね。セシリア嬢の持ち物ですし、なくなれば騒ぎになるかもしれません)

別に高級品ではない。どこにでもある普通のボールペンだった。日本の学生も使うような品。同じものを用意してすり替えるのが最良だが、今は手持ちがなかった。

ヴェロニカは少し考えたあと、胸元から一本のペンを取り出した。

盗聴器のペンとすり替えるわけではない。ヴェロニカは盗聴ペンを机の上に置くと、自分のペンを握りペン先を盗聴ペンに向ける。カチリと、ペンの尻を押すとペン先から青白い火花が走った。同じことを数回繰り返す。

ペン型のスタンガンである。電流を流すことでボールペンの中に仕込まれた盗聴器を無効化したのだ。

（Qのつくる玩具もたまには役に立ちますね）

念のために、もう一度ISを起動させて盗聴器の状態を確認する。思ったとおり無力化できていたのを確認して、ヴェロニカはもう一度ISを待機状態に戻した。

「おまたせー」

盗聴器のペンをもとあった位置に戻したとき、ちょうど友人が紅茶を淹れて戻ってきたところだった。

「ありがとうございます。ではいただきますしうか」

ヴェロニカは持ってきた焼き菓子を広げて微笑んだ。

ティータイムを済ませるとヴェロニカは部屋を辞した。そのまま寮舎を出て人気のないところまで携帯電話を取り出す。

『なんだ』

相手は1コールで出た。鉄のような冷たさの声が通話口から響く。「ラブロックです。織斑教諭。セシリア・オルコットの寮室において盗聴器を発見しました。無線式3・録音式1。無線式の1つは回収不可能だったのでその場で無力化しました」

『ああ、適当に処分しておけ。虫くらいで休みにわざわざ電話してくるな』

「了解です」

通話の相手は織斑千冬。このIS学園の教師であり、過去にはISの国際大会で活躍したこともある世界有数のIS乗りの一人である。

ヴェロニカはポケットから盗聴器を取り出し、地面にばらばらと

落とした。踏みつけて少し力を入れるとたやすく潰れる。

『他に何か報告することはあるか』

「ISが東南の海上から視線を察知しました。船舶かISかはわかりませんがなんらかの斥候が潜んでいるものと思われます」

『分かった』

「あと」

『まだ何かあるのか』

「明日の実技ですけど用意するのは体操服で大丈夫でしょうか？」

『……明日は実機での訓練だ。ISスーツで来い』

「了解です」

『たまに、貴様は学生なのか諜報員なのか判断に苦しむな』

「両方であります。織斑教諭」

『ふん、ヒヨッコが。MI6でどんなぬるま湯に浸かっていたのか知らんが、ここの訓練は甘くないぞ。覚悟しておけ』

「了解しました」

ヴェロニカはそう言って通話を終える。

ヴェロニカ・ラブロックはIS学園の一年生である。黒髪にアイスブルーのひとみ。少し背が低くて成績も中の下。クラス内でも目立つタイプではない普通の少女。そういうことになっている。

だが、ヴェロニカには一介の学生とは別の、もう1つの顔があった。英国情報局秘密情報部、通称MI6の諜報員という顔である。

英国が誇る情報機関、その名も名高きMI6が少女の棲家だった。米国中央情報局（CIA）と並ぶ超有名情報機関であり、誰でも名前くらいは聞いたことがある組織だろう。しかし、その著名度に反して実態を知っているものはほとんどいない。少女はその謎に包まれた組織の一員である。

このIS学園の周囲は世界でもっともスパイの多い場所の一つだ。華やか学園生活の裏では血で血を洗うような諜報戦が繰り返されている。MI6はIS学園を中心に諜報員を多数配置してきたが、諜報員を生徒そのものとして送り込むのはこれが初めてだった。MI

6とIS学園保安部との交渉で、保安部に一定の協力をする条件に『004』ヴェロニカ・ラヴロックの入学が認められた。

『004』それがヴェロニカのコードネームだ。MI6には通常の局員以外にゼロゼロナンバーと呼ばれる特殊諜報員がいる。彼らは特別な権限を与えられたエージェントで、任務に対する報酬も桁外れだ。無論、その分危険度も重要度も高い任務を任されている。英国内から優秀な人材が選ばれるのが基本だが、外部からスカウトされることも時折ある。過去には他国のテロリストや犯罪者すらも手駒として使ってきた。

ヴェロニカのような小娘がゼロゼロセクションのメンバーに選ばれることは極めて異例である。ヴェロニカはたしかに英国の養成校で優秀な成績を収め、すでにいくつかの任務もこなしている。だが、才能だけで選ばれるほど生やさしい称号ではない。それでは、ヴェロニカにはそれを覆すほどの才能があるのか。否、少女とは関係ないところでこの称号は与えられた。

今年の新人生の中に諜報員を潜りこませるのはもともと決まっていたことだった。その理由はセシリア・オルコットにある。両親を亡くしたあと、独りで家を守ろうとする健気な少女。彼女にはひそかにファンが多い。英国の社交界ではすでに話題になって後援会などもできつつあったが、ISの代表候補生として名前を売ったことで庶民層にも爆発的に人気が高まった。そのセシリア・オルコットを陰ながら守り支えるために送り込まれたエージェント。それがヴェロニカ・ラヴロックである。

この時点でヴェロニカは004ではない。そのきっかけとなる事件が起きたのは今年に入ってからだ。それまでISは女性しか動かせないとされていた。その常識が壊される大事件が起きたのだ。ISを動かした男性というのは日本の少年だった。少年の存在は瞬く間に世界に激震を起こした。それは、諜報の世界も例外ではなかった。

ISを動かした少年はIS学園に入学することになった。それに

よりIS学園を中心とした諜報戦は一気に激しさを増したのだ。M
I6も予算と人員を増強してそれに対応した。その資金繰りに困っ
た上層部が打った苦肉の策が、ゼロゼロセクションの資金に手をつ
けることだった。ゼロゼロセクションの予算は通常の情報局の予算
とは別に用意されており、ゼロゼロナンバーの任務のためならその
膨大な資金を使うことができる。IS学園の任務に付いている諜報
員の誰かに空席のゼロゼロナンバーを与え資金を流用するというも
のだ。

こうして、史上最年少のゼロゼロナンバー。『004』ヴェロニ
カ・ラブロックは生まれた。その過程を知る者はヴェロニカを『仮
初めの四番』と呼ぶ。

01（後書き）

007は映画で数作みた程度です。クロスというよりも味付け程度だと思ってください

拍手ボタン設置して見ました

重箱のフタを開けると湯気に混じって甘いタレの香りが鼻孔をくすぐる。つやつやと白石のように輝く白米の上に、年代物の楽器のような重厚な焼き色の魚が載っている。箸を通すとまるでプディングのように魚の身がほどける。タレのからだ米といっしょに口に運ぶ。

（やはり、やはり素晴らしいものです。あの悪魔の魚からこのような至福の味を創りだすとは。まさしく東洋の神秘。おなじ島国でなぜかくも差がついたのか）

ヴェロニカは昼食のうな重をゆっくりと食べていた。IS学園にやってきて良かったことといえば食事である。IS学園にはあらゆる国から生徒が集まるため、食堂では世界中の料理を食べることができる。それも形だけのものではなく、本場の人間が食べてもうなるほどの料理ばかりだ。

（悔しいですが、これは先輩の言っていたとおりかもしれませんね）
国を出る前に情報局の同僚たちが言っていたのだ。よその国の料理に慣れると帰国してから食事に困るから気をつけろと。さすがに故郷の味には勝てないだろうと思っていたが、入学してすぐにヴェロニカの舌は世界の美食に屈服してしまった。ヴェロニカは毎日いろんな国の料理を食べているが、英国料理はめったに食べることがない。

特に日本料理がヴェロニカのお気に入りだ。ヴェロニカの祖母は日本人で、もともと日本食には馴染みがあったのもある。中でもこの鰻重はメニューに上がると必ず食べるくらい気に入っている。

そもそも、ヴェロニカはウナギが大嫌いだった。英国にはウナギのゼリーという料理があるのだが、これが味はともかく見た目がよくない。小さな頃にこれを食べて気分が悪くなって以降、ヴェロニカは終生ウナギを食べないと誓った。

その誓いはIS学園に来てすぐに破れた。食堂で鰻がメニューにあがったとき、馴染みのある日本食だからという理由でヴェロニカはそれを頼んだ。大変気に入っただが、自分のたべた魚があの悪魔の魚だと気がついたのはずいぶんあとだった。

鰻重を半分ほど平らげたところで肝吸いをすすする。器と手で隠すようにしながら食堂の中を観察する。

食事中も任務は続行中だ。セシリア・オルコットに不審な目を向けるものがないか、服に虫を付けるようなそぶりをするものがないか。注意しながら鰻を楽しむ。注意するのはセシリア・オルコットよりも彼女に対してなんらかの動きを見せるものだ。というよりも、最近ではセシリア・オルコットに視線を送るのが危険になっている。

セシリアは学園で唯一の男子である織斑一夏と近しい。見たところ完全に惚れているようだ。それは別にセシリアに限った話ではない。学内の生徒は多かれ少なかれ織斑一夏という存在が気になっている。世界中でたった一人のIS適性のある男性。IS学園に入学するような女子からすればスペシナルな存在に見えるのだろう。

その織斑一夏と近しい生徒の一人に、ラウラ・ボーデヴィツヒという少女がいる。銀髪眼帯という特徴的な容姿の美少女で、独逸の代表候補生である。この少女が問題だった。歩き方や視線の運び、カンの鋭さなどから見て、明らかに一流の戦争屋だった。ヴェロニカがわずかに視線を送っただけでもその気配を敏感に察知する。ヴェロニカが番犬ならばラウラは軍用犬だ。もし戦えばISならば勝負にならない、生身での戦いでも分が悪いだろう。

下手に織斑一夏の周囲を監視してラウラに感づかれてはたまらない。セシリアが織斑一夏とくっついているときはヴェロニカは他に気を配ることにしていた。

鰻重を食べ終えたちょうどそのとき、ヴェロニカの携帯が鳴った。画面を確認すると、織斑千冬とあった。

「もしもし」

『ラブロックか。さっき市街で爆弾騒ぎがあった』

「本当ですか、被害は？」

口元を隠しながら話す。

『いや、幸い爆発前に保安部が処理した。だが状況からみて数日以内に設置されたものには間違いない。他にも爆発物がある可能性もある』

「私は何を？」

『まだそんな段階ではない。本格的に手が足りなくなれば上を通じて正式に要請する。一応そういう騒ぎがあったとだけ伝えておく。その情報からお前がお前の権限の中でどう動くかは自由だ』

「了解しました」

珍しいことだ。IS学園がヴェロニカに対してこういったことをするのはめったにない。何か事故があってもよほどのことでないかぎりあとになってから知らされる。

当然といえば当然である。ヴェロニカは少々事情は特殊とはいえ、所詮は一介の学生でしかない。IS学園側から容認されている活動はセシリア・オルコットの身辺警護に関することだけだ。それ以上の行為もヴェロニカは行っているが、それはあくまで『黙認』であって公的に認められた活動ではない。

ヴェロニカ本人も、自分が身辺警護以上の役に立つとは思わなかった。同世代の中では優秀であると自負しているが、一人で何でもできると思えるほど自惚れてもいない。街にはMI6の仲間が多く潜伏している。ヴェロニカがじゃばらなくても彼らが既に動いている。

あくまでヴェロニカはセシリア・オルコットの身辺警護が任務なのだ。それ以外ではただのIS学園の生徒。それに英国も、セシリアのためだけに入学枠をひとつ潰したわけではない。

ISは戦争兵器と一般的には考えられているが、MI6ではこの兵器は諜報や護衛の現場にこそ向いていると見ている。将来的にはISを要人警護の要にする計画だと耳にしたこともある。女王陛下

を始めとして、英国には守らなければならない人物が数多く存在する。だからこそヴェロニカをIS学園に入学させ、大切なISを一台機ヴェロニカの専用機にしたのだ。最先端のIS技術を身につけて帰るのもヴェロニカの任務である。

そのヴェロニカにわざわざ情報を回してくる。これをどう判断するべきか。

（猫の手も借りたいのか、それとも試されているのか）

何にせよ、何もせずに動かないというのはヴェロニカの性に合わない。食器をカウンターに返すと、ヴェロニカは食堂を後にした。携帯を取り出すと『ユニバーサル貿易日本支局』へと電話をかける。

「ヴェロニカです」

『あら、ヴェロニカ。学生生活はどう？ 友達はできたかしら？』

ユニバーサル貿易はMI6が隠れ蓑に使っているダミー会社だ。

IS学園に在る間はヴェロニカはこの帰属となる。

「それなりには。食事が美味しいのが嬉しいですね」

『恋人は……できるわけないか。女子高だものね。あ、でも例のスペシャルがいたか』

「話したことほとんどないですよ、それに彼にはセシリア嬢が熱を上げていますし。そもそも、任務中に色恋にかまけるようなことはしません」

『優秀なエージェントは恋も任務も両立するものよ。それで、なんの用？』

「さっき街で爆弾が見つかったとか」

『あら、情報が速いわね。場所はショッピングモールの駐車場。処理したのは学園の保安部よ。さっきから電話が鳴りっぱなし。もう勘弁して欲しいわ』

「私はどうしましょう」

『いつもどおりよ。学園で何かあれば知らせて』

予想通りの答えだった。あくまでヴェロニカはお飾り、『仮初め

の四番』。必要とされてはいない。

「了解」

通話を切る。ほんの少しだけむっとしたが、ここでしゃべるほどヴェロニカも子供ではない。

(なら、私は私の縄張りを守るとしましょう)

IS学園の中は生徒と関係者以外は入れない。学園の中の調査はヴェロニカにしかできない任務だ。

ヴェロニカは物陰に隠れISを起動させた。黒とグレイで構成された無機質な配色。流線型のボディは殆ど素体のような簡素さだった。特徴的なのは両肩の上に浮いている金色の球体である。

MI6特殊装備開発局が試作した第3世代型IS G・Eである。ゴールドデン・アイ

情報戦・諜報戦に特化した機体であり、戦闘能力という意味では現行のISの域を出ない。その名の由来となった金色の球体はまさしくこのISの両眼であり、あらゆる情報を収集・処理して搭乗者にダイレクトに伝えてくる。

だが、現在このISの能力の大部分は封印されている。その気になれば単機で国家レベルの機関と情報戦ができる機体を、機密だらけのIS学園の中に置くわけにはいかないからだ。この封印の解除にはIS学園とMI6双方の承認が必要となる。

ヴェロニカがG・Eを完全起動させることは滅多にない。普段の虫取り程度なら部分起動で十分なのだ。だが、広範囲の情報を精査するとなると完全に起動させなければ難しい。

(こういうときに電磁迷彩は便利ですね)

封印状態のG・Eに残されている機能の1つである。ISの周囲に電磁的な結界を張って身を隠すものだ。本来ならばISの知覚すらも完全に誤認させることができるが、今G・Eでは人間や監視カメラ程度しか騙せない。

ヴェロニカが専用機を持っているのは他の生徒には秘密になっている。見るからに普通のISではないG・Eを見られるわけにはいかないのだ。

（何もないとは思いますが、爆弾は囧で手薄になったIS学園を狙うって可能性もありますしねー）

黄金の眼が学園全体の情報をかき集める。収集した情報は感覚へと編纂され、搭乗者へと直接流し込まれる。光学情報は視覚に、音波情報は音に、空間情報は気配に、空気中の物質は匂いに。

「んっ……」

溢れ出すほどの情報の洪水にヴェロニカの脳が軋む。軽い車酔いのような状態に陥るが、ヴェロニカはそれを気合で押さえ込んだ。

封印状態のG・Eだからこんなもので済んでいるが、本来はこの比ではない。英国で初めて乗ったとき、ヴェロニカは降りてからしばらく歩けなくなったほどだ。それに比べれば軽い眩暈など痛くも痒くもない。

今のヴェロニカには学園の全てが視えている。庭木にとまる小鳥から廊下での立ち話まで全て把握できる。見えてくるのはいつものおりの日常ばかりだ。任務ならともかく、意味のない盗み聞きは趣味ではない。何もないのなら早く打ち切ろうと思った時、寮舎の付近に不審な影を見つけた。

（寮舎の陰に誰がいる……機械音……それに、この匂いは……）

ISを待機状態に戻す。軽い眩暈を振りきって、ヴェロニカは寮舎へと走った

02 (後書き)

拍手ボタン設置して見ました

「動かないでください」

寮舎の裏。うずくまって何かをしていた人影に音もなく近づいて隠しナイフを突きつけた。学園内に銃器は持ち込めないので玩具みたいな刃物しか武器はない。刃先で首筋をなでるようにしながら相手のことを観察する。

IS学園の制服。長い赤毛の白人女性。リボンの色からして二年生。名前は思い出せないが、アメリカからの生徒に該当する生徒がいたはずだ。

「両手を上げて、ゆっくりそこから離れなさい」

「誰だてめえ」

悪態をつきながらも赤毛の少女は両手を上げて立ち上がった。足元には黒っぽいナイロンのカバンが転がっている。さっきGEで見た通りなら、早急に処理する必要がある。

「答える必要はありませんね。私の命令にだけ従いなさい」

焦りが出る。カバンの中身はまず間違いない爆弾である。市街での爆弾騒ぎは四で、こちらが本命だったのだ。

「両手を頭の後ろで組んで這いつくばってください」

テロリストが本物の生徒として在籍していたのだろうか。それとも、制服だけを着た偽物か。とにかく拘束してしまおうと、制服の隠しポケットから、拘束用の特殊バンドを取り出す。

その一瞬。赤毛の少女が動いた。首筋に突きつけていたナイフに、自分からぶつかってきたのだ。自殺ともとれるような行為にヴェロニカは目を見張る。だが、ナイフから伝わってきたのは肉を裂く感覚ではなく、硬い何かにぶつかるものだった。

赤毛の少女がヴェロニカのナイフを持った手を掴んだ。そのままくるりと回るように逆肘を突き込んでくる。赤毛がはらりと舞って少女の首元があらわになる。赤毛の少女は首に革のチョーカーを巻

いていた。チョーカーには。金属製のスタッズがあしらわれている。少女はナイフをこれに当てることで防いだのだ。

ヴェロニカは腕を捕まれ肘鉄を避けきれなかった。肘がみぞおちにめり込み、一瞬息ができなくなる。その隙についてヴェロニカは地面に組み伏せられた。ナイフを持っていた手をがちりと極められて身動きがとれない。ヴェロニカも習得している拘束術に近い。ただのテロリストではない。あきらかに訓練された人間の動きだった。

「はい没収ー。はン、チャチなナイフ」

極めた手からナイフがもぎ取られる。背中の上に乗った赤毛が勝ち誇ったように言った。

「じゃああたしの番だあな。てめえは誰だ」

「人にものを尋ねるにはまず自分から名乗るのが礼儀ではないでしょうか？」

「あいにく育ちがわるくてなあ、いきなりナイフつきつけてくる相手に払う礼儀は身につけてねえ」

「こちらもテロリストに名乗る名前は持ちあわせていませんね」

「ああン？ あー……、ああ」

ヴェロニカの言葉の何が引っかかったのか、赤毛は何かを考えるような気配を見せた。その隙をつき、ヴェロニカはポケットからペン型スタンガンを取り出した。後ろ手に赤毛の足に突き付け、思い切り引き金を引く。

「あっ！ てっめ、この」

電撃にひるんだ赤毛が極めていた腕を離した。ヴェロニカはそのまま地面を這うようにして赤毛の足元から抜けだした。柔道の寝技の要領で背後にまわりこみ、蛇のように四肢をまわりつかせる。そのままチョークスリーパーで首を絞める。

「が……く」

数秒で赤毛はがくりとうなだれた。失神したのかを何度か確認してから、ヴェロニカは赤毛の手足を拘束した。

携帯を取り出し、保安部に直接連絡を入れる。

「こちらヴェロニカ。寮舎裏で不審者を拘束しました。爆弾とおぼしき不審物も確認」

『了解。少し時間がかかるかもしれないが何名か向かわせる』

連絡をいれてようやく一息つく。今になって考えてみると赤毛に接触する前に保安部に連絡をいれておけば良かったのだ。めったにない緊急事態ということに気が焦っていたのだろう。

この生徒が何者かは気になるが、今は爆弾の方が重要だった。生きている爆弾だとすれば保安部を待っている余裕はない。

ヴェロニカはポケットから筆箱を取り出した。中に入っているのは筆記用具に偽装した工作用具だ。これくらいなら普通に隠し持てばいいと思うのだが、凝り性のQがわざわざ作って押し付けてきたのだ。

「ま、待て」

カバンを開けようというそのとき、背後から赤毛の声が聞こえた。

「もう起きたのですか。丈夫ですね」

「く、このクソガキが……。あつたまいてえ」

「良いところで起きてくれました。私は今からこの爆弾を解体しようと思うのですが、構造を教えてください。貴方も自分のしかけた爆弾で死にたくはないでしょう？」

ゴールデン・アイを使えばすぐに解析できるが、この女の前で使うわけにはいかない。吐かないならもう一度失神させればいい。

「だからちげえっての。あたしもその爆弾を見つけてバラそうとしてたところだったんだよ。それを早とちりしやがってこの腐れアマ」

「はあ？ ……証拠はあるんですか？」

「あたしはお前を知っている。M I 6所属のエージェントだな。名前はたしか……ベロニカ・ラブロック」

ヴェロニカは思わず息を飲んだ。自分がM I 6の諜報員だということは教師でも知っているものはほとんどいない。いや、英国でも内密になっている情報だ。それを知っているこの女は何者だ。

「けけけ、誰だお前ってツラだな。アメリカ出身でてめえと同じような身分ってだけでわかんねーの？」

「……CIAですか」

上司からCIAのエージェントも学内にいるとは聞いていた。だがヴェロニカは名前も顔も知らされていない。この赤毛は知っていたのにだ。単に組織内の立場の違いなのかもしれないが、それがカンの触った。

米国の情報機関であるCIAは古くからMI6密接な繋がりがあ
る。史上何度も共同作戦を行って来た。IS学園のことでも上の方
では協力体制ができているのだろう。

「……面白くありませんね」

「面白くねえのはこっちだ。さっさとこれ外せ」

「名前と、自分を証明できるものを見せたら開放しましょう」

「ドロシー・ペトレイアス！ 身分証は制服の胸ポケット！ 学生
証の裏に隠してある」

赤毛の制服を漁るとたしかに学生証が出てきた。革のケースの裏
側をみると、CIAの紋章の入った身分証も見つかる。この赤毛は
たしかにCIAの職員のような。

「ったく。イギリスの情報局は駄がなってねえな」

手足の枷を外してやるとドロシーはそう悪態をついた。ヴェロニ
カは無視して爆弾に向かう。

「で、これなんですが」

「ああ、さっき軽く見たよ。時限式でまだ時間には余裕がある。寮
に生徒が戻ってから爆発するようにしてあるんだろうな。光学セン
サーとかはなかった」

「ああ、大体わかりました」

「解体の経験あんのか？」

「この造り、欧州では最近いちばん流行りの爆弾なんですよ。爆弾
テロっていったら大体これですね。訓練だけですけど私も何度か解
体したことあります」

「へえん」

ヴェロニカが爆弾を解体しはじめると、ドロシーは横であぐらをかいて座り込んだ。ヴェロニカの持っている工具セットを興味深そうに眺めている。

「なあ、これ置いたのどんなやつだと思う？」

「テロリストなんだろうが、IS学園ねらいとなると想像が付きませんね」

「この国はそういうのとはあんまり縁がないし、日本のとばかりってよりは学園側がまいた種だわな」

軽口を叩きながら次々とセンサーを黙らせていく。爆弾の構造がシンプルなのもあるが、この手際の良さは並大抵のものではない。ヴェロニカ・ラブロックは『仮初めの四番』だが、それでも英国の少女たちの中から選びぬかれたエージェントなのだ。

「ああ、さっき貴方が落ちていた間に保安部に連絡を入れておきました。そろそろ駆けつけると思いますけど、私は手が離せないので説明おねがいできますか」

「あいよ。つと、言ってるそばから誰か来たな」

ドロシーが立ち上がる。ヴェロニカは解体を続けていたが、背後でドロシーの悲鳴が聞こえ、思わず振り返った。

「つ……」

白銀の髪。緋色の目。左目を覆う眼帯。獰猛な獣のような雰囲気。一年最強と噂される少女、ラウラ・ボーデヴィツヒがそこにいた。赤い右目は明らかにヴェロニカに敵意を向けてきている。足元を見れば綺麗に気絶させられたドロシーが気持ちよさそうに眠っている。「戦闘音と火薬の匂いにつられてきてみれば……貴様ら、ここで何をしている。そこの爆弾はなんだ」

「ま、待って、これは」

さっきのヴェロニカとドロシーと同じ状況だった。自分で言うのもなんだが、もっと状況を確認してから突っかかってきて欲しい。

「IS学園でテロとはいいい度胸だな。何者かは知らんが、私と私の

嫁の暮らしを邪魔する者には容赦はせんぞ」

「だから違―」

「問答無用!」

ヴェロニカが釈明する間もなくラウラは飛び込んできた。恐怖のあまりISを呼びだそうとしたのが間違いだった。GEが起動する前にラウラの拳がみぞおちに突き刺さる。身体がきれいにくの字に曲がった。さっきドロシーに打たれたのと同じ場所なのもあり、一瞬気が遠くなる。無防備に下がった首筋に向けてラウラの手刀が振り下ろされる。

「が……」

自分が何をされたのかも分からないまま、ヴェロニカの意識は綺麗に刈り取られた。

「それで、ガキども。何か言いたいことはあるか」

生徒指導室でヴェロニカ・ドロシー・ラウラが三人揃って立たされていた。鉄面皮を怒りで歪ませた織斑千冬が仁王立ちしている。

「このチビどもが勝手に勘違いして突っかかってきたんです―、あたし悪くありません」

ドロシーが軽口で千冬の視線を受け流す。こうして並ぶとドロシーはかなり背が高かった。ヴェロニカ・ラウラとくらべると頭ひとつぶんは背が高い。

「ほほう。では聞くが、なぜ爆弾を見つけてから保安部への報告を怠った」

「あ、いや……その」

千冬はヴェロニカの隠しナイフを持っていた。それを三人の前で、まるでゴムでできた玩具のように曲げてみせた。隠匿性優先の薄いナイフとはいえ、金属の塊を片手で握り潰す千冬に三人の背筋が凍る。さっきまで軽口を叩いていたドロシーも顔を青くした。

「申し訳ありません。功を焦るあまり報告を怠りました」

「次! その二人! よく確認せずに襲いかかる奴があるか!」

突如自分たちに矛先が向けられ、ヴェロニカとラウラはぴんと背を伸ばして答える。

「はい。申し訳ありません教官殿！」

「教官ではないと言っている！」

「はっ。失礼しました」

ラウラが千冬に怒られている横から、恐る恐るヴェロニカも声を上げる。

「申し訳ありません！ ですが爆弾ということで早急に対処する必要があると思います、つい焦ってしまいました」

「……なぜ爆弾だと分かった？」

「は？ ……あ」

「この馬鹿者が！ 学内でむやみにISを使うなど言っているだろう」

「す、すみません」

学園内では指定の場所以外ではISの使用は禁止となってる。明確な校則違反ということで他の二人に比べてもヴェロニカはこっぴどく絞られた。

数十分の説教からようやく開放され、三人が生徒指導室から出る。とき。千冬が言った。

「ラブロック。爆弾の処理に関しては褒めてやる。よくやったな」

「あ、ありがとうございます」

03 (後書き)

拍手ボタン設置して見ました

「あ」

「む」

学食でラウラと鉢合わせした。先日の生徒指導室以来でヴェロニカとしてはやや気まずい。

「この前はすまなかったな」

思っていたよりも素直にラウラは謝ってきた。転入してきた当初は狂犬のように誰かれ構わず噛み付いていたのに、ここ最近は丸くなってきたようだ。

「いえ、私も同じことをあの赤毛にしましたし、恨みっこなしです。それよりも、私のことは他言無用でおねがいますか」

「ああ、それはわかつている。人それぞれ事情はあるだろう。織斑先生にも言われているしな」

この軍用犬も織斑教諭だけには頭があがらないらしい。ISがなくとも、あの鬼のような強さは誰でも恐れるだろう。だが、ラウラにはそれ以外にもなにか繋がりがあるようだった。ヴェロニカは少し気になったが、お互い色々あるのだと詮索はしなかった。

「そういえば、学内の虫の掃除をしているのはお前たちか？」

「気がついたものは処理しています。個室の中までは面倒見切れませんがね」

「嫁の部屋にいた虫は出来る限り排除しているが、私も専門ではないのでな。本職に手を貸して貰えると嬉しいんだが」

「織斑くんの部屋ですか？ あー……、それは学園側にやってもらった方がいいかと。織斑くんと、あとは篠ノ之さんの部屋の掃除は正直言ってやりたくないです。部屋の外からでもむちゃくちゃな量あるってわかりますから」

世界で唯一のISを動かせる『男性』である織斑一夏。ISの開発者である篠ノ之束の妹、篠ノ之箒。この二人はIS学園で最もホ

ットな諜報の要である。

「そうか……。念のために聞くが、貴様は仕掛けていないだろうか？」

「私はIS学園の許可をもらって正式に在籍している生徒ですから。そんなことをすれば一発で放校です」

盗聴器自体は持っているが、それは口にしない。

話しているうちに二人の番がやってきた。ラウラはドイツ料理を注文していた。ヴェロニカはそれを興味深そうに見つつも、中華ランチBセットを注文する。

「む。すまんが嫁が来たのでな」

「はいはい。それでは」

小テーブルを陣取って織斑一夏を呼ぶラウラを置いて、ヴェロニカは大テーブルに一人座った。

今日のセットは炒飯・餃子・スープ・冷菜だ。

このセットの主演は紛れもなく炒飯である。卵・ネギ・肉の旨みを炎によって米に閉じ込める中華の秘宝。これをいかにエレガントに食べるかが今日のテーマだ。まずは炒飯を数口思う存分楽しむ。少し口飽きしてきたところに口直し。スープと冷菜で口の中をリセットしたところで餃子だろう。重要なのは餃子のタイミングだ。3つしかない餃子をいつ食べるか。均等にペース配分して食べるか、後半に集中させることで食事にダイナミックな変調を起こすのも捨てがたい。

（前半は炒飯が主役。後半は餃子が主役の二部構成で行きましょう）
ヴェロニカが炒飯をもりもり食べていると、テーブルの向かいに誰かが座るのが分かった。

「あー！ つつたく。どっかのチビのせいでえらい目にあつたぜ」

目の前に座ったのは赤毛で背の高い女だった。手足に鋏付きの革アクセをつけて制服もパンク風に改造してある。ドロシーはロングサイズのBLTサンドを食べていた。口元が汚れるのも構わずにぱりぱりとかじっている。

「おい、聞いてんのかよチビガキ」

ドロシーを無視してヴェロニカはスープを飲む。明らかに料理の味がまずくなった。一応上級生とはいえ、この態度はムカつく。

ヴェロニカが炒飯を半分ほど片付けて餃子にとりかかろうとしたとき、3つある餃子のうち一個がすつと消えた。

驚いて顔をあげると、ドロシーが素手でつかんだ餃子を口に放り込むところだった。タレも何も付けずに直接。それを見てヴェロニカは絶叫する。

「あー！ ああああああ……、私の餃子が、第二部のの主役が……最高のクライマックスが」

「けけ、無視してっからだ」

けらけらと笑うドロシーにヴェロニカは殺意のこもった視線を投げる。目尻にはうっすら涙まで浮かんでいた。

「ん、んだよ。餃子いっこくらいでそこまで怒んなよ。ほれ、一口やっから」

その形相に驚いたのか、ドロシーが食べかけのBLTサンドを差し出してくる。ヴェロニカはそれを無視して残りの料理を一気に平らげた。炒飯をスープで流し込んで立ち去る。

ヴェロニカは訓練用のアリーナまで早足でやってきた。なぜか後ろにはドロシーがついてきていた。チェーンのついたブレスレットをチャラチャラ言わせながら歩いてくる。

「なー、どこ行くんだよ。訓練場でもいくのか」

「ついて来ないでください」

「ツれねえこと言うなよ。仲良くしようぜ。同じ諜報員同士」

「協力関係はありえても仲良くはありえません」

「つつまんねえガキ」

ヴェロニカはこのガラの悪い上級生がかなり嫌いになっていた。同じ諜報員とは思えない。もしかするとこういうキャラを演じているのかもしれない。これなら誰がどうみたって諜報員には見えない。だとしてもヴェロニカにとって仲良くしたいタイプではなかった。

「んで、こんなとこまで来たのはなんなんだよ」

「織斑教諭からここの『掃除』をするように言われたんです。この前の罰に」

ヴェロニカはわざと『掃除』の部分を強く発する。

「ケハハハ、怒られてやんの。でもアリーナの掃除か……いいぜ、あたしもつきやってやるよ。どっちが多く集めるか競争な」

「やりたければどうぞ」

あずかっていた鍵を使って、ヴェロニカはアリーナのドアを開けた。

「って、マジで掃除かよ!」

「掃除って言ったじゃないですか。なんだと思ったんです?」

「てめえが! あの違い方したら! 普通は虫取りだと思うだろうが!」

「そっちが勝手に勘違いしたんです」

二人はアリーナの更衣室で普通に掃除をしていた。モップや雑巾を持って普通に掃除をしている。なんだかんだでドロシーも掃除に付き合っていた。

普段の清掃は専門の清掃員が行っている。外部の人間は盗聴器など情報漏洩の原因になりやすいため、内部で専門の部署を作るべきだという声も多い。だが、IS学園を作る際に現地でそれなりの反対運動があったのだ。IS学園に対する反感を少しでも薄くするために、現地での雇用はある程度受け入れなければならないのが現状だった。

「以外に掃除が様になっていますね」

ドロシーは言動とは裏腹に丁寧にモップがけをしていた。スミにホコリがたまることもなく、綺麗な床になっている。

「ガキンときは清掃のバイトしてたしな。CIAの訓練所でも下っ端は掃除ばかりだ」

「ああ、それはウチの養成所も同じですね」

意外に苦労人のような一面と、少しだけだが自分との共通点が見えてヴェロニカの声は少し柔らかくなる。

「しかし、なんでここの連中は反対運動なんかすっかね。おかげで余計なクソが入り込んでこっちとしちやいい迷惑だ」

「なんだかんだで、この学校は軍事学校ですからね。それも自国ならともかく、世界中から生徒が集まるんですから。近隣の住人からは敬遠されてもしかたないですよ。国レベルでは大歓迎なんですよけど」

「あー、あー、なるほどな。それでなくてもこの国の人間は基地とかに過敏だしな」

「それもあるかもしれませんね」

IS学園の誘致は世界中の国が希望した結果この国に決まったものだ。IS開発者の篠ノ之博士の意向との噂もあるが、真実は定かではない。日本政府は諸手を上げてIS学園を歓迎したのだが、それと現地住民の感情は別である。いかに国益があらうと、嫌なものは嫌だというのが民衆というものだ。

無駄話をしながらも更衣室の掃除は大体終わってしまった。二人でやった上に、ドロシーの手際がとても良かった。

「あの、その……手伝っ……」

「ヘイ 見ろよ」

ヴェロニカはややそっぽを向きながら礼を言おうとしたが、ドロシーの声で遮られた。

「12個だ。あたしの勝ちな」

ドロシーは手の中にたくさん盗聴器や監視カメラを持っていた。掃除の合間に見つけたのだ。ドロシーもヴェロニカと同じくらい、いや、もしかするとヴェロニカよりも働いていたのにもだ。

「しょ、勝負にのるなんて言ってませんよ！ それに虫の駆除はこのあとやるつもりだったんです！」

「しらねーなあ」

「む、向こう！ 向こうのISフィッシングルームで勝負です」

「おお、いいぜ。あっちならここよりもずっと多そうだしな」

二人は掃除用具を担いで我先にとフィッティングルームへと走っていった。

その後、アリーナ内のほとんど全ての部屋を掃除した。一進一退でなかなか勝負がつかず、決着が付きそうになると総合発見数や種類別で得点に差をつけるなど新ルールが次々に登場し、延々と二人は掃除を続けていたのだ。いつまでたってもヴェロニカが鍵を返しに來ないことを不審に思った千冬がやってきて勝負はドローとなった。

「あれ、ヴェロニカ。今日なにかいいことあった？」

「はい？」

寮の自室に帰ると、ルームメイトがそんなことを言ってきた。

「だって、すごく機嫌よさそうな感じだから」

「き、気のせいです。別にそんなことはありません」

ヴェロニカは思わず頬を染めて顔を隠した。

04（後書き）

拍手ボタン設置して見ました

英国のサッカー好きは有名である。もとより欧州ではサッカーは人気のあるスポーツだが、近代サッカーの母国と言われる英国ではその熱気は特別なものとなっている。ときおりその熱がいきすぎてフリーガンのような社会問題になるほどだ。

ヴェロニカは英国人だが、さほどサッカーには興味はなかった。ヴェロニカの好きなスポーツはモータースポーツである。サッカーはせいぜい、プレミアリーグで地元のチームが勝つと嬉しいといった程度のものだ。選手も有名どころしか名前をしらない。

なので、今回日本で開催されるサッカーの国際試合もあまり関心がなかった。

『ひどいと思わない？ 私がせっかく苦勞して手に入れたチケットを任務用に回せて言うのよ？ それなら最初から用意しておけばいいのに、まったく』

「はあ」

ヴェロニカは『ユニバーサル貿易』に定期連絡を入れていた。このところ電話をするたびにサッカーの話題で辟易する。相手の話を遮るように強引に話を戻す。

「それで、任務に関してなにかありますか」

『ああ、近々ちよつと大きなミッションがあるわよ。それもサッカーがらみの』

「はい？ 選手の護衛でもしろって言うんですか？」

いつもどおり『変更なし』との答えが返ってくると思っていたヴェロニカの声が裏返る。

『開会式の会場警備のお手伝い。せっかく日本開催なんだからってことで、IS学園の生徒さんたちが花束の贈呈をすることになったのよ。それで警戒レベルがちよつと上がっちゃって』

「うっわ、本当ですか」

注目度の高いスポーツの大会はただでさえテロなどの対象になりやすい。そこにIS学園の生徒という別の爆弾を放り込むのだ。警戒度は上がって当然だろう。

『最初は生徒さんにISで開会式の演出に加わってもらって話もあったんだけどね。IS学園側が突っぱねたらしいわ。爆弾騒ぎもあったから慎重になっているんでしょね。被害が実際に出てたら生徒の開会式の参加自体取り止めになってたかも』

「そういえば、爆弾について何か分かったんですか。学園側からも何も情報が降りてこないのよ」

爆弾は街と学園内で1つずつ見つかった。ヴェロニカはそのうち1つを解体したが、構造はわかって出所や犯人などの見当はつかない。何度か学園側に問いただしてみたが梨の礫だった。

『それがさあっぱり。どこもやつきになって犯人探ししてるけど中々尻尾を出さないの。CIAも相当手こずってるみたい』

MI6はヴェロニカに嘘は言わない。隠し事がたまにあるだけだ。なので爆弾について分かっているのは事実なのだろう。

「上は、今度の開会式でも同様の犯行があるの？」

『可能性のひとつとしては考えているわ。もちろん、あらゆる敵を想定して動けとお達しよ』

「分かっています」

敵を限定してしまっただけは判断がブレる。想定の外側から来る攻撃に弱くなる。

『当日の状況にもよるけど、貴方は会場の外で友軍のような扱いになると思うわ』

「ISの使用は？」

『不可。G・Eはまだ実験段階の部分も多い試験機。誰が見ているかも分からない場所では使わせられないわ』

「了解」

他、細々としたことを確認してから電話を切る。国際レベルのスポーツイベントの会場警備という大きな任務に、ヴェロニカは我知

らず胸を高鳴らせた。

過ごしやすい陽気の日だったが、街は燃え上がるような熱気に包まれていた。開会式の会場はかなり離れているというのに街中にユニフォームを来た若者が溢れている。外国人の姿もよく目につく。外国人に対してシャイな日本人もこの時だけは別だ、祭りの熱狂に任せて一緒になって騒いでいた。

開会式のあるスタジアムにほど近い駅前広場だった。巨大なビジョンに映しだされた開会式の映像を囲み、階段や歩道、陸橋とところ狭しと人がごった返している。

ヴェロニカは遊軍として街の中を歩いていた。不審者や不審物の探索をしながら、どこかで問題が起きればそのフォローが役割だ。今日はもちろんIS学園の制服は着ていない。あんな目立つ制服では自由に動くことができない。街に溶け込むのに相応しい変装をしている。日本のティーン・エイジャーで流行している服装。安っぽくて目がちかちかしそうな色の服だが、この人混みの中に紛れるにはもってこいの記号だった。メイクで肌の色も日本人風にごまかしている。ヴェロニカはもともと日本人の祖母によく似ているので、それだけで十分日本人に見えた。アイスブルーの瞳は目立つためキヤスケツトを深くかぶってごまかしている。

（なるほど……これはこれで、悪くないものですね）

祭りに熱狂している街を見て、ヴェロニカはそう思った。ヴェロニカはサッカーにあまり興味はないが、この熱だけは伝わっている。F1の観戦をしているときのあの興奮。タイヤの焼ける臭いとオイルの臭いの中で汗だくになって騒いでいるあの感覚を思い出す。見ている夢が違うというだけで、そこにある熱狂は同じものだ。その実感がヴェロニカのやる気に火をつける。

（……といっても、この群衆の中では不審者というのなかなか判別が付きません）

もとより異国人のヴェロニカは日本の街をよく知らない。どうい

う人物が普通なのかも判別が難しい。IS学園にきてから周辺の街に何度か足を運んだが、まだ慣れるものではない。さらに、今の街はイベントで世界中から人が集まっている。この混沌とした群衆の中から不審なものを探すのは至難の業だろう。

仕方なく駅前広場をぐるりと散策する。目に付くのは至る所に出ている屋台だ。移動販売車や自転車で引いている流し売など、色々な食べ物の店が出ている。人が集まるところにこういう店が集まってくるのは万国共通のようだった。

開会式の様子も見ないで、周りと騒ぐわけでもなくひとりでブラブラしているだけでは目立つかもしれない。ヴェロニカはそう判断して屋台で食べ物を買うことにした。

（怪しまれるといけませんからね。うん）

ヴェロニカが買ったのはたい焼きだった。好きなバンドのメンバーの好物だという話を聞いたことがあったからだ。魚の形をした愛くるしい焼き菓子を袋に詰めてもらった。人混みから少し離れた陸橋の下で食べる。頭から食べるのか尻尾から食べるのか作法が分からず、割って半分づつ食べていく。

（ほう。ほほう……これは、なかなか……）

焼いた衣で豆のペーストを包んだだけの素朴な菓子だ。衣は表面はカリッと固く、中はしっとりとした食感が楽しい。アンコという豆のペーストも、食べてみると美味しかった。ヴェロニカは一部の西洋人と同じく、甘い豆のペーストというものに苦手意識があったのだが、それが食わず嫌いだったと証明された。

（考えてみればピスタチオクリームも同じようなものですしね）

これで大福やおはぎなど、これまで敬遠してきたアンコ系の和菓子群と向き合うことができる。次々とたい焼きを食べながらヴェロニカはそんなことを考えていた。

ヴェロニカがたい焼きをあらかた食べ終えたとき、片言の日本語で話しかける者がいた。

「はい？　　なんでしょう」

話しかけてきたのは三人の白人男性だった。ひとりがたどたどしい日本語で道を尋ねている。ヴェロニカを日本人の女の子だと思っているようだった。

ヴェロニカもこの街に詳しいわけではないが、任務前に大まかな地理は頭に叩きこんである。日本語もおぼつかない外国人よりはマシだろう。国際的なスポーツイベントの開催ということで街の至るところに色々な言語で観光案内などが書かれているものの、それでも異国の街というのはわかりにくいものだ。

「良いですよ、ちょっと待ってくださいね」

親切心から地図を広げる。そのとき、自分が自然と日本語で受け答えをしていることに気がついた。母語といっても数ヶ月使わないだけで出てこなくなるものかと苦笑する。彼らがどこの人間かは分からないが、日本語よりは英語のほうがマシだろう。

英語で話しかけようとしたとき、ヴェロニカの耳に三人の会話が飛び込んできた。

（ハハハ、日本人はお人好しってホントだな。ノコノコついてきたぜ）

（でも日本のポリスは優秀だって言うぜ、大丈夫かな）

（大丈夫だって。この人混みだぜ、バレやしねえよ）

ヴェロニカが理解できないと思って堂々と話している。訛りからして米国人のようだ。英国人にはありえない南部訛りだ。

金目的かそれ以外が目当てかは分からないが、人混みに紛れて犯罪をしようという不逞の輩だ。人の数が増えればこの手の人種も増えるのは仕方のないことだった。

「ふう」

路地裏に三人を連れ込んでほどよく殴り倒したあと、警察に連絡を入れておいた。頬についた血をハンカチでぬぐいながら街の巡回に戻る。

テロリストとは違うが、ああ言った連中も紛れ込んでいるのが現

状だ。イベントを成功させるため、不逞の輩の排除もヴェロニカの仕事といえる。

「ねえ君！ どっから来たの？」

「チケット一枚余ってるんだけどさあ、一緒にいかない？」

ワンボックスカーに乗った大学生風の日本人の青年たちだった。

ヴェロニカが無視していいこうとしても、徐行しながら延々とついてくる。

（面倒くさいなあ……）

車に半ば強制的に連れ込まれながら、ヴェロニカは心中でぼやいた。

そんな風に祭りに乗じて浮かれた馬鹿どもを4グループほど立て続けに潰した。いい加減に面倒になってきてどこかの店に落ち着くと思ったがどこも満席である。

（……これじゃただの辻斬りでなんの警備にもなっていない気がする）

ヴェロニカがそう思い始めた時、駅前で酒盛りをしながら騒いでいる若者の一人がこっちにやってくるのが見えた。

「いよいよチビガキ！ てめえも来てたかーあーははは！」

革とチェーンだらけの派手なファッションの赤髪の女がビール片手にやってきた。なぜか頭にはテングロンハットをかぶっている。

「ンだよてめえもそんな服装できるんじゃないか。いつも制服しか着てねえからそれ以外もってねえと思ってたぜ」

「どちら様でしょう。私は笹川藤子という日本人の女の子ですけど」

「なァーにふざけてんだよ。てめえも警備がてらここに呼ばれたクチだろ？ ウチの連中に聞いたぜ」

「……任務中に話しかけないでください」

馴れ馴れしく肩に手を回してくるドロシーをはねのける。

「つか笹川ってなんだよ。それに珍しく化粧なんかしてやがんな、色気づきやがって」

「祖母の名前です。メイクは日本人に紛れ込むためにやってるんで

す」

「あ、へえー。そうなんだ。日系なのか。どーりでツラが乳くせえわけだ。ケケケ」

「大きなお世話です。あと、酒臭い息を吹きかけないでください」
ドロシーは街の若者たちと酒を飲んではいしゃぎ回っていたようだ。周囲には人種性別問わずたぐさんの人たちでごった返している。みな、祭りの狂騒を心から楽しんでる様子だ。

「任務中に何やってんですか貴方は」

「現地調査の一環として酒盛りをしておりました！　キャハハハ！」
「この酔っぱらいが……」

任務中に酒に酔うその無神経さにヴェロニカは苛つ。こんなの一緒にいては自分の仕事ができない。さっさと向こうに行こうとしたそのとき、数人のグループがドロシーたちのグループに近づいてきた。

さっきまでヴェロニカが殴ってきたのと同じような連中だ。向こうも酒が入っているようで、ひとりがむりやりヴェロニカに抱きつかうとしてきた。

「あ、ありゃ？」

酔っぱらいの素人に捕まるようなヴェロニカではない。わずかなステップで男の手から逃れる。抱きつかうとした男は足を滑らせてその場にこけた。それをみたドロシーの連れたちがどっと笑う。

それが気に入らなかつたのだろう。絡んできたグループの何人かが声を荒げてドロシーたちに喰ってかかった。

（ああ、もう）

もともとタチの悪い連中だ。酔っ払っているのは周りに迷惑をかけるだけでなく勢いで犯罪にも走りかねない。何人か声の大きい連中だけでも眠らせてしまおう。

ヴェロニカが掌打の構えをとろうとしたとき、広場に流れていた音楽が大きく変わった。開会式の会場からの中継の音だ。さっきまで荘厳な重苦しい音楽だったのが、陽気で楽しい祭りに相応しい曲

になっている。

一瞬、街の空気が止まる。ヴェロニカも、騒いでいた若者たちも、音の変わりようにあっけにとられる。

止まった街の中で、踊りだした少女がいた。中継の音楽に合わせ、赤い髪を振り乱して軽快にステップを踏んでいく。音に弾かれるように次から次へとリズムを変化させていく。

踊りや、歌にはもともと力がある。人間がまだ動物だったころから伝わる最古の表現手段だ。力のある踊り手のダンスは、それだけで人を惹きつける。ヴェロニカを含め、広場にいた若者たちはドロシーの踊りに一瞬釘付けになった。

ドロシーが叫ぶ。言葉じゃない。ただの叫び。動物の鳴き声のような原始的な。それだけで十分伝わってくる。騒ごう・楽しもう。踊ろう・歌おうと。

広場の空気がひとつになる。混然としていた空気がひとつにまとまって騒ぎ始める。まるでシェイカーで混ぜ合わされたカクテルみたいに。さっきまでいがみ合っていたふたつのグループも、もはやそんなことはどうでもいいとばかりに騒いでいた。

「ハッハーっ！ 飲んでるかオラー！」

「飲みません！」

一瞬だけ広場の空気を支配したドロシーは、すぐにもとの酔っぱらいに戻ってヴェロニカに絡んできた。

「ダンスでも、やってたんですか？」

「あん？ あんなのガキの遊びだ。ウチの近所の連中なら誰でもやれたぞ」

げらげらと笑いながら隣にいた男のもっていたポップコーンを勝手にひとつかみ食べる。いきなり食べ物を取られた男は少しびっくりにした顔になるが、ドロシーが笑顔を向けてハイタッチをするとそのまま騒ぎの中に消えて行ってしまった。

ヴェロニカはそれを羨ましそうに見ていた。どんな場でもすぐに溶け込んでしまうこの快活さが、ドロシーの諜報員としての最大の

武器なのだろう。それはきっと、自分にはないものだ。ISの操縦がいくらうまくても、人の倒し方をどれだけ学んでも、本当にすぐれた諜報員にはなれない。ただ暴漢を殴り飛ばしているだけの自分では。

「……あなたの馬鹿さ加減がたまに羨ましくなります」

「ああん？ 喧嘩売ってんのかチビガキ」

「褒めているんですよ」

尊敬できる先達が近くにいる。それはとても幸せなことになった。口が裂けても言わないけれど。

05 (後書き)

拍手ボタン設置して見ました

ヴェロニカはビルの陰で酔を覚ましていた。ビル風がアルコールと狂騒で火照った肌に心地いい。

無理やりビールを数杯飲まれた。英国では子供の頃から酒を嗜むので、ヴェロニカも初めての飲酒というわけではない。ただ、日本に来てからは飲む機会がなかったため、久々のアルコールに身体が驚いてしまったようだ。

ミネラルウォーターをちびちびと飲む。これを飲み干したら任務に戻ろう。ヴェロニカはそう決めてビルに切り取られた空を見ていた。

「む」

ヴェロニカの耳にひたひたという静かな足音が聞こえてきた。普通の足音ではない。訓練された人間の足音だ。そこで浮かれている連中が騒ぎを抜けてきたのなら、もっと荒っぽい足音になる。ヴェロニカは足音から相手の特徴を読む訓練も受けていた。

（何者でしょう）

はじめはドロシーが来たのだろうかと思った。だが、すぐにその考えは消える。ドロシーは足音を消すこともできるが、普段荒っぽい足音をさせて歩いている。それに、今日ドロシーが履いていたブーツではこんな足音を出すことはできない。

街にはヴェロニカたちのような諜報員が大勢潜んでいる。もちろん、警備の人間はそれ以上に居るだろう。そういった人間の誰かだろうか。

（なら、取り立てて気にする必要も――あ）

ヴェロニカは今の自分の立場を思い出した。完全に日本人に見えるメイクを施しているのだ。英国ではいざしらず、日本では未成年の飲酒はご法度である。もし警備の人間なら補導されてしまう。英語で話して外国人だと証明してもまずい。身分証を提示させられた

らMI6に連絡が行ってしまう。任務中に酒を飲んでサボっていたなどと分かったらMI6のいい恥さらしだ。周りにはまた『仮初め』だと馬鹿にされてしまう。

ヴェロニカは慌ててどこかに隠れようとした。だが、通り抜けられると思ったビルの合間にはフェンスが張ってあり袋小路になっている。仕方なく近場にあったビルの通気孔へと潜り込んだ。ちいさなヴェロニカの身体はこういうときに便利だった。

ほこりっぽいダクトの中でヴェロニカが息を殺していると、足音がダクトのすぐ近くで止まった。ダクトから外は見えないが、ごそごそと何かを取り出す気配があった。

「フォックスか。今どこだ……ああ。俺の携帯の位置は分かるな、誰にも見られないように来い」

男の声が聞こえてきた。早口の英語でどこかに電話をしている。内容からして、明らかに普通の人間ではない。

ヴェロニカは思わず手持ちのボイスレコーダーを取り出した。彼がどんな人間なのか、どんな話をするつもりなのかはわからない。だが偶然手に入れた情報でも英国のために役立てる。それがMI6であり、ゼロゼロナンバーだ。

心臓が高鳴る。諜報員というと映画や小説の中では華やかな活躍をしているが、そんなものはごくごく一部だ。ほとんどの人間は地味で汚い裏方仕事に徹している。ヴェロニカが今日までやってきたように、不毛で本当に役に立っているのかと思えるような仕事ばかりだ。

子供のようになくわくしながら出方を伺う。不謹慎だが、できれば大規模なテロの計画でも話して欲しいとヴェロニカは思った。自分が手に入れた情報でテロが未然に防がれる。きっと、仲間たちもヴェロニカを『仮初め』などと言わなくなるだろう。子どもっぽい空想だが、期待するのを抑えられなかった。

さっきとはちがう、こつこつと硬い足音が近づいてきた。

「来たか。周りには誰も居なかっただろうな。ああ、ならいい」

男が何かを相手に手渡したようだった。がさり、と軽い紙袋のよ
うな音が聞こえる。

「計画は予定通り実行する。開会式でIS学園の注目度が上がって
いる今が好機だ。派手に爆破してやれ」

ヴェロニカは思わず息を飲んだ。まさか、IS学園に対するテロ
の話が出るとは思わなかった。予想外の事態に鼓動が速くなる。

「標的はこいつだ。前回のような失敗はするなよ、フォックス」

ヴェロニカはテロリストの顔が見たいと思った。誰かが分からな
いとテロの目的もはつきりしない。男の声紋だけでもかなりのこと
がわかるだろうが、『フォックス』と呼ばれている相手の声も欲し
かった。

IS学園は世界で唯一のIS教育機関ということで、良くも悪く
も注目されている。テロの対象になるのも無理は無い。例えば一部
の国では、女性だけが扱えるISを宗教的に導入しづらい現状があ
る。必然的に軍事バランスが乱れ、ISのせいで国際的な地位が下
がった国はいくらでもあった。そういった不満をISの象徴ともい
えるIS学園に対してぶつけられることもあるだろう。

犯人の顔を想像しながら、ヴェロニカはじつと息を潜めていた。

「ああ、大丈夫だよ。もうヘマはしねえ。つうか前回はてめえらの
不始末でこっちまでバレルハメになったんだろうが。上手くごまか
したからいいものを」

フォックスと呼ばれていた相手が初めて喋った。その声に、ヴェ
ロニカは愕然とした。

(ドロシー……)

いつもとはまるで違う怜悧な声だったが、間違いなかった。

(何故？ CIAが？ それとも……二重スパイ？)

頭の中にいくつもの可能性が浮かんでは消える。そうであって欲
しくないという願望がありえないようなことまで持ち上げてくる。

「で、なんでこいつなの？ セシリア・オルコット」

「注目度に比べて殺して恨みを買う所が少ない。二年後ならわから

んが、今ならただの代表候補生だ」

「ふうん。ま、いいさ」

セシリア・オルコットの名前が出てきて、ヴェロニカは現実引き戻される。

さつき、ドロシーは『前回』と言った。それはきつと、ヴェロニカが解体したあの爆弾に違いない。一連の爆弾騒ぎの首謀者はCIAだったのだ。そして、どういう目的かはわからないがCIAはIS学園に爆弾をしかけてセシリア・オルコットを殺そうとしている。それは、ヴェロニカにとって絶対に阻止しなければならないことだった。そのためにヴェロニカはIS学園に送り込まれ、『仮初めの称号』を与えられたのだ。

だが、あまりにも大きすぎる問題を目の前に、ヴェロニカは震えるばかりだった。CIAの男とドロシーが行ってしまったあとも、通気孔の中でじつとうずくまっていた。

06 (後書き)

拍手ボタン設置してみました

数日後。

開会式は無事に終わった。開会式ではIS学園の生徒たちが各国の代表チームに花束を贈呈した。その瞬間に開会式の中継は最高視聴率を記録し、世間のISに対する注目度が明らかになった形だった。

参加した生徒は学内でちょっとした人気者だ。普段は世間と隔絶された環境で暮らしているだけあって、こういうニュースは格好のネタになる。そんなこともあってIS学園にはサッカーブームがやってきていた。寮の娯楽室のテレビではいつ行ってもサッカー中継が写っている。

娯楽室にほとんどの生徒が集まってサッカーを見ているのを横目に、ヴェロニカは人気のなくなった寮へと歩いていった。

とある寮室の前に立ち止まり、インターホンを押す。

「ああ？　なんだ、てめえか。珍しいな」

ドロシーはすぐに出てきた。いつもどおりのぶっきらぼうな態度だ。

「ちょっと、いいでしょうか？」

「おう、まあ入れよ。散らかってっけど」

あとについて部屋に入る。ドロシーのベッドは通路側だと一目で分かった。メタルバンドのポスターやギターなどがあつたからだ。ポスターは以前、ドロシーが好きだと言っていたバンドのものだった。

「ルームメイトの方は？」

「サッカー観戦だによ。お国のチームの試合だつてんで同郷の連中と一緒に見るんだってさ」

知っている。さっき娯楽室にいるのを確認してきた。

「あなたは、サッカーには興味は？」

「あんまねえなあ。ウチの国じゃそれほど人気ねえし。見るなら野球、やるならバスケかね」

「私も、それほどサッカーには興味ないですね。やるならテニス、見るならモータースポーツが好きです」

「へえ、英国人はみんなサッカー狂いだと思ってたぜ」

「米国にだって野球に無関心な人は居るでしょう？」

「そらそーだ」

ヴェロニカが椅子に座って待っていると、ドロシーは冷蔵庫からコーラの缶を二本だしてきた。コーラはよく冷えていて、美味しかった。

それから、とりとめのない話をした。どんな音楽が好きか。子供の頃やった遊び。最近見た映画。行ったことのある観光地。二人の嗜好も経歴もバラバラだったが、なぜは話が弾んだ。

まるで、友達のように。

冗談を言って二人で大声で笑いあったあと、名残惜しそうにドロシーが言った。

「なあ、なんかあんだろ。世間話しに来たわけじゃ、ねえだろ」

「……はい」

二人の間には常に一定の距離があった。近づきすぎてもいいことはないとお互い分かっていた。一緒に掃除をしたり、酒を飲んで騒いだりしていても、超えてはいけないラインをお互いで引いていた。

その一線を、ヴェロニカは今日超えた。それが意味することを、ドロシーも分かっているのだ。

ヴェロニカはポケットからオーディオプレーヤーを取り出した。イヤホンがなくてもスピーカーから直接音を出せるタイプだ。

『標的……フォックス……前回は……セシリア……計画……』

雑音まじりの音声流れる。先日、通気孔の中で録音した音声だ。ドロシーと、CIAの男のやり取りが入っていた。

「フォックスというのは、貴方ですね？」

ヴェロニカがまっすぐに目を見て聞くと、ドロシーは目を閉じて軽くため息をついた。

「そうだ」

「私が貴方と初めてあったとき、貴方は爆弾を解体してたんじゃない。設置していたんですね」

「そうだ」

「セシリア・オルコットを、爆弾で殺そうという計画を立てていましたね」

「その通りだ」

ドロシーはよどみなく答えていく。否定や言い訳の一つもして欲しかった。だが、ドロシーは当たり前のことのように計画のことを明かしていった。

「で、あたしはどうすればいいんだ？ 保安部に行けばいいのか？

それとも、警察に直行か？ C I A からもねえと見ると、もう全部話についてるんだろ？」

捕まることを覚悟している様子だった。命令とはいえ、I S 学園に対するテロ行為を行ったのだ。彼女の処分は軽いものにはならないだろう。C I A が取引するかもしれないが、そうだとっても学園に彼女の居場所はなくなる。

「……まだ、誰にも言ってません」

「はあ？」

M I 6 にも、I S 学園にもドロシーのことを報告していなかった。重大な規則違反だった。今すぐ、004の資格を剥奪されてもおかしくないほどの。

「何も、なかったことにできませんか。命令なんかなかったことに」
「できるわけねえだろ」

「い、今から一緒に保安部に報告に行きましょう。そうすれば、あなたは」

「馬鹿かてめえ！」

ドロシーが袖口からナイフを抜いて斬りかかってきた。オーディ

オペレーターでとっさにそれを受け止める。オーディオプレーヤーに半分ほど食い込んでナイフは止まる。ナイフ越しにドロシーの視線が刺さる。

「ヴェロニカ。てめえには失望した。てめえになら捕まってもいいと思った。てめえがちゃんと、国のためにあたしを告発したなら、それで満足だと思った」

ドロシーの目には、はつきりとした怒りと侮蔑が浮かんでいた。向けられたナイフは脅しではありえない力が込められている。ヴェロニカはオーディオプレーヤーのシリコンカバーで絡めとるようにナイフを奪った。武器を奪われ、ドロシーは椅子を倒しながら距離を取る。ヴェロニカもベッドの脇にそって移動する。基盤やカバーが絡みついたナイフは使い物にならず、ヴェロニカはそれを部屋のスミに投げ捨てる。

「何故……ですか。なんでこんなことするんですか」

「理由なんて知らねえよ。命令だからだ。決まってるだろ。あたしは組織っていう巨大な機械の末端の歯車だ。お前だってそうだろ」

「だからって、理由も分からずにこの学園を壊すんですか、同じ学校に通う仲間を殺すんですか！」

「ああ、殺す。命令されれば子供だって殺す。それが合衆国のためになるならなんでもする。あたしは、そういうモノだ。あたしは、お前も同じだと思ってた。この学園で、唯一対等な相手だと思ってた。そういうお前になら、捕まって良かった。けどな、違った。おまえは情にながされて任務を忘れるクソ野郎だ。学園のほとんどの生徒と同じクソガキだ。覚悟もできてねえハンパ者が、偉そうにあたしに情けをかけるんじゃない！」

ドロシーが逆の袖からナイフを引きぬく。倒れている椅子をもものともせずに飛びかかってくる。紙一重。ナイフはヴェロニカの制服を切り裂いたように見えた。だが、軽く切れるはずの制服は存外に硬く刃を受け止める。ヴェロニカの制服は防刃繊維を編みこんだ特殊仕様だ。隠しナイフ程度で切り裂けるものではない。

防刃繊維でナイフが一瞬止まったのを見て、ナイフを持つ手に拳を落とす。痛打された手首が落としたナイフを、ヴェロニカはすぐにベッドの下に蹴り込んだ。

隠し武器がなくなったドロシーが殴りかかってくる。ヴェロニカもムキになったように掴みかかる。

「命令、命令って！ 自分で判断してないことを偉そうに言わないでください！」

「自分の甘ったれを棚にあげてんじゃねえ！」

ほとんど子供の喧嘩のような取っ組み合いだった。髪をつかみ、服を引きちぎり、頬に爪を立てる。もともと足場の悪い室内での戦闘はそういうものになりがちだ。だが、この二人の場合。剥き出しの感情がぶつかり合って自然にそうになっていた。

二人が満身創痍のぼろぼろになったころ、部屋のドアが勢い良く開いた。数名の足音が足早に室内に入ってくる。

「そこまでだ！」

織斑千冬が、数名のSPを引き連れて立っていた。この学園の生徒なら誰しも震え上がる状況だが、ふたりはそれも無視して殴り合っていた。

マウントをとっていたドロシーが殴り飛ばされる。ごん、と鈍い音が響いてドロシーの頭が壁に激突する。返す刀でヴェロニカの頭を片手でつかみ、子猫のように軽々と持ち上げる。

「そこまでといったぞ」

万力で締め上げるような痛みで、ヴェロニカはようやく我に帰った。ドロシーも頭を押さえながらベッドに座っている。解放されたヴェロニカは千冬に言われるままにドロシーの隣りに座った。

ヴェロニカもドロシーも、状況がつかめていなかった。

大げんかをしていたから誰かが千冬を呼んだ、という雰囲気ではない。それなら保安部の黒服が何人も来ているはずがない。これは明らかに、保安に関する事態だ。

「ペトレイアス。貴様の上司であるハワード・バリスは死亡した。」

拳銃自殺だ。現在、C I Aの一部と軍高官数名を拘束して取り調べ中だ。貴様にも召還命令がきている」

「そう、ですか」

ドロシーは全てを諦めたのか、糸のきれた人形のようにうなだれた。

「我々としても詳しい事情が知りたい。少し、話を聞かせてもらおうぞ」

「……はい」

保安部の黒服数名に囲まれ、ドロシーは部屋を出ていった。手錠こそされていないものの、その姿は連行される犯罪者そのものだった。部屋を出ていく際、ヴェロニカの方に少しだけ視線を送った。

「……じゃあな」

何も言えないまま、ドロシーは去っていった。

部屋には、千冬とヴェロニカだけが残された。

「事情を、教えてください」

「……あの国が一枚岩ではないことは知っているな」

「はい」

C I Aには複数の作戦部署が存在し、それぞれが独自に動いている。末端のエージェントには限られた情報しか与えられず、ときに同じC I A同士で殺しあうことすらあるという噂だ。同じ合衆国の機関であるペンタゴンとも対立することがあるという。

「ペトレイアスはC I Aの中でも軍よりのところにてな。軍とC I Aの一部が暴走して今回のことを計画したらしい」

「あの、なぜ米国がここを狙うんですか？」

「I S学園を米国に欲しい連中がいる、ということだ」

I S学園は各国の思惑が重なった上で日本という国に作られた。世間的には『押し付けられた』という形になっているが、実際は違う。最先端のI S技術の実験場を、手元に置きたがらない国などないのだ。各国の間で奪い合いが起こった。そんな中、E U諸国は早

めに折れた。もともとまとまりのない寄り合い所帯である。そこにIS学園などという火種を持ち込まれてはかなわないと早々に辞退した。他の国々も同じような理由で折れていったが、最後まで粘った国があった。それが米国である。結局、国連での票数を集められずにIS学園は日本に作られることになった。その鬱憤晴らしかのように、運営費の大半を日本は押し付けられることになる。

「ここでテロが起きれば、日本国にはIS学園を運営する能力がないとして、米国に移される。そういうシナリオですか？ セシリア・オルコットを殺せば、英国も米国に同調して日本を非難すると」

「だろうな」

そうまでして、自分の庭にIS学園が欲しいのか。手元に置いておかないと不安なのか。

「……そういえば、なんでこの計画が露見したんですか？ CIAで自浄作用が働いたんでしょうか」

「いや、外部からのリークだ。独自に情報を察知したエージェントが証拠を盗み出したらしい」

「……すごい人がいるんですね」

CIAの機密を盗み出すなど、まともな人間の仕事ではない。仮にG・Eの封印を解かれたとしてもヴェロニカはやりたくなかった。

「何を言ってる、貴様の同僚だ」

「は？ あー……」

脳裏に一人の男が浮かぶ。

女王陛下の切り札。最高のゼロゼロナンバー。MI6きつての伊達男。ヴェロニカも数回しか会ったことはないが、あの男ならやるだろうという風格があった。

「あらかた片付けてからこっちに情報を流してきた。相変わらずキザな男だ」

「え、織斑教諭、お知り合いですか？」

「……昔、少し世話になったただけだ。弟のことだな」

千冬はやや遠い目をしていった。そこには、ヴェロニカが簡単に

触れてはいけないものがあるように思えた。

ヴェロニカの疑問はあとひとつだった。M I 6が、なぜこのタイミングでC I Aの暴走を察知できたのかということだ。露見すれば英国との関係に亀裂が入る行為。C I Aがそう簡単に尻尾を出すとも思えない。ヴェロニカが知ったのもほとんど偶然のようなものだ。いかにあの伊達男といえども、情報のないところから解決したのでは手際が良すぎる。

「織斑教諭……M I 6は、私について何か言っていましたか」

「ああ。貴様のI Sには発信機がついているそうだ。向こうの意志で貴様の言動をチェックすることができる。それで、今回の件を知ったらしい」

「やっぱり、そうですか」

腕時計になっているG・Eを見る。自分にも知らされていない機能があると思っていたが、裏切りに備えた機構も入っているとは思っていなかった。

「安心しろ、今後は私の許可無く使用することがないよう釘をさしておいた」

「今後って……私は、お咎めなしですか、てっきりM I 6に召還されるものだ」と

「Mからの伝言だ。『これを教訓にしてはげみなさい』だそうだ」

Mとは、M I 6の最高責任者の通称である。M I 6は、ヴェロニカが情に流されることも計算済みだったのだ。組織にも信頼されず友人を守ろうとしても裏目に出る。だから自分は『仮初め』なのだ。

「先生は……怒らないんですか？ 私を。私は、私情に流されてI S学園を危険に晒すかもしれない行動をしました」

「貴様が私の部下ならそうしている。ここが情報機関ならそうしている。だが、ここはM I 6でもC I Aでもない。学校だ。諜報のことでとやかく言う筋合いは私にはない」

あの厳しい千冬ですら、ヴェロニカを責めない。M I 6も誰も、自分には期待していないのだ。唯一責めてくれたのはドロシーだけ

だ。それも、裏目に出てしまった結果でしかない。

「叱って、ください」

叱られるのなら、責任を取らされるのなら、覚悟していた。だが、自分が無力な子供だと思い知らされるのは、耐えられなかった。

千冬が、ヴェロニカの肩に手を置く。いつも力強いその手は、触れてみると意外なほどに柔らかい。

「ラブロック。私は教師だ。上司でも、上官でもない。他のなによりも友だちを優先したお前を、褒めることはあっても叱ることはできません。誇れ、ラブロック。友情を選んだ自分を、恥じる必要はない」

「私は……組織の人間です。ドロシーにもそう言われました」

「お前くらいの歳じゃ組織や国に忠誠を誓うことなどできません。できた気になったとしてもそれはそう思い込んでるだけだ。本物の忠誠や愛国心というのは、組織や国に対して持つものじゃない。そこにいる家族や友人との絆を、それを育んできた場所を愛するということだ。そういう意味では、友達を大切にする奴はいい諜報員に慣れるさ」

相変わらずの硬い声だったが、その優しさは十分に伝わってきた。鉄のような女性だと思っていた千冬が、こんな声も出せるのだとヴェロニカは思った。

「ありがとうございます、織斑先生」

まだ自分を誇ることはできなくても、前を向けるだけの力が出てきた。世界有数のIS乗りの言葉は、ヴェロニカにたしかかな力を与えてくれた。

「まったく、手のかかるガキだ」

千冬がそう言ってかすかに微笑んだとき、IS学園に轟音と衝撃が走った。

07 (後書き)

拍手ボタン設置してみました

轟音のあとに数秒、寮の明かりが消えた。電気はすぐに復旧したが携帯電話はつながらず、無線にもひどいノイズが交じる。千冬は事態を確認すべく保安部へと直接向かった。その後ヴェロニカも続く。

「何があった!」

「お、織斑先生。ドロシー・ペトレイアスが逃亡しました!」

「逃亡だと?」

「ド、ドロシーが逃げたって……どういことですか」

ヴェロニカは保安部の黒服に思わず詰め寄る。

保安部の中は大騒ぎになっていた。ほとんどの電子機器が使用不能に陥り、保安部の機能の大半が死んでしまっていた。技術者と職員が全力でシステムの復旧に当たり、手の開いている職員は片端から電話をかけて対応に追われている。

「ISの封印解除コードが盗み出されていたようです。ドロシー・ペトレイアスは専用機を使って逃走しました。追跡しようにもあのISのジャミング攻撃で保安部の大半の機能が破壊されてしまいました。車で何組か搜索に当たっていますが、ステルス性も兼ね備えている機体です。本気で隠れたら我々ではもうどうしようもありません」

「あの馬鹿ものが……」

千冬はいらだたしげに机を殴った。ドロシーの専用機もまた、ヴェロニカのG・Eと同じく情報・電子戦に特化した機体だったのだ。能力を制限されていた点も変わらない。その機体が全力で攻撃すれば保安部を一時的に機能不全にすることなど造作もない。

「ドロシーは……どこに逃げるつもりなんでしょう。CIAに帰って証拠を隠滅するつもりでしょうか」

「いや……あいつの所属していた部署は今回の件でほとんど壊滅し

ている。CIAにはもうあいつの居場所はないだろう。逃げるとしたらCIAと対立する軍部やFBIか……もしくは他国に亡命か地下組織に身売りするつもりかもしれん」

「そんな……」

ヴェロニカと千冬が話していると、保安部の黒服の携帯が鳴った。どうやら携帯の電波は復旧したようだった。電話に出て話していくうちに、黒服の顔色が重くなるのが分かった。明らかに、いい報せではない。

「追跡していた者たちから連絡が入りました。市街で完全にドロシー・ペトレイアスを見失ったようです。……追跡は、実質不可能です」

千冬の顔が曇る。髪をかきむしり、目をナイフのように尖らせて言った。

「……日本国・および関係各位に通達。コード478が発生。警察・自衛隊に協力を要請しろ」

ISの私的専有は重大な犯罪行為だ。限られた数しか存在しないコアをめぐる世界各国がパワーゲームを繰り広げている。盗んだものは世界中で指名手配されるし、盗まれた側も重大なペナルティがくだされる。許可無く転用・転売なども禁止されている。

今この瞬間。ドロシーはCIAの工作員という立場から、明確な犯罪者になろうとしているのだ。

ヴェロニカはドロシーのことを何も知らない。CIAという組織のことも知らない。そこで落伍したものにどんな末路が待っているのかも知らない。きっと、楽なことにはならないだろうとは想像つく。だが、それでも世界中から追われる身になるよりマシなはずだ。ヴェロニカはなんとしても、友達を止めたかった。

「待ってください!」

どこか諦めたように淡々と後処理を始めていた保安部に、ヴェロニカの声が響いた。

「私に、追わせてください」

「黙っている、ラブブロック。今は子供のダダに付き合っている暇はない。あいつはISを持ったまま逃走した。その意味が分からんわけでもないだろう」

IS学園には生徒とISを管理する責任がある。そのために日本をはじめ世界中の国々から資金をふんだくっている。そのIS学園で、生徒がISを持って出奔するなど、あつてはならないのだ。

千冬をはじめ、IS学園の大人たちは最悪の事態を回避するために責任ある行動をとろうとしている。ヴェロニカのような、子供が口出しできる雰囲気ではなかった。

でも、黙っていることはできなかった。ヴェロニカは一生分の勇気をだして言った。

「よくあることじゃないですか。こんなこと」

大人たちが、何を言っているという表情でヴェロニカを睨む。

「生徒が夜中に寮を抜けだして街に繰り出す。みんなやっていますよ。先生方もご存知ですよ。そんなに大騒ぎすることじゃないです」

遊び盛りの少女たちが学校や寮におとなしく閉じ込められているはずがない。学院から抜けだすルートは何パターンも開発され、生徒の間での公然の秘密となっている。ヴェロニカに言わせればバレバレの脱走経路なのだが、学院側も多少の火遊びはガス抜きとして黙認している節があった。

そもそも、IS学園にほど近い街はIS学園のために整備されたと言っても過言ではない。どんな言語でも不自由なく買い物を楽しめるようになっていし、商業・娯楽施設だけでなく各種宗教施設までも完備してある。地域人口に対して分不相応なほどの『都会』が人工的に作られているのだ。監視網も万全で生徒を完璧に管理できる環境が整っている。街そのものがIS学園の生徒のために作られた箱庭なのだ。

「……それとこれとは別だ。あいつがここに帰ってくるはずがないだろう」

「私がいきます。私と、私のISならばドロシーを追えます」

ヴェロニカのG・Eは情報戦に特化したISである。これならばドロシーの専用機と互角に渡り合えるはずだ。IS学園によって封印されている機能を開放すれば、G・Eから逃げられるものなどない。

「私が、絶対に連れて帰ってきます」

千冬の刃のような瞳とにらみ合う。ヴェロニカは一步も引かないという想いを視線に込めた。自分ならできる。自分にしかできない。それをヴェロニカ自身がしなくて、誰がヴェロニカを信じてくれるだろうか。

しばらくにらみ合ったあと、千冬はヴェロニカに背を向けた。そのまま黒服たちと話し始めてしまう。

「織斑教諭！」

「……二時間だ」

千冬は携帯電話とパソコンをいじりながら言った。

「二時間は我々で確保してやる。それを過ぎたらアウトだ。分かったな」

「あ、ありがとうございます！」

「礼を言っている暇があったら走れ。解除コードのほうはこっちでやってやる」

「はい、行ってきます！」

ヴェロニカはすぐさま部屋から飛び出していった。部屋にいた大人たちはその背中を見送る。みな、どこか楽しそうに笑っている。

「さあ貴様ら！ 子供だけに格好つけさせるな。ガキどもが帰ってくるまでの時間を可能な限り稼ぐぞ。世間知らずのガキどもに、大人の実力を見せつけてやれ！」

千冬の大喝に、保安部の職員たちは笑って答えた。みな、このくらいは慣れていると言った顔だった。

190馬力の黒馬のいななきが夜空にこだまする。ヴェロニカが

スロットルを開放するのに合わせて二輪の蹄が寧猛にアスファルトを蹴る。人気もまばらな国道を200キロ近い速度で疾走していく。200キロある車体にちいさなヴェロニカが跨る様は異様のひとことだったが、ヴェロニカは自分の身体の一部のように二輪の暴れ馬を操っていた。

ヴェロニカがMI6から支給されたバイクだ。日本メーカーの外モデルだが、Qの趣味的なカスタマイズにより様々なギミックのついたモンスターマシンへと変貌している。日本製バイクならば日本で目立たないとQは言っていたが、自分の五倍の重さのバイクをちびのヴェロニカが乗り回す時点で異様なのだ。いちおうIS学園に持ってきてはいたものの、使う機会もなく倉庫に置きっぱなしになっていたものだった。

向かっているのはドロシーが最後に目撃された街のショッピングモールだ。ISで飛んでいけばもっと速いのだが、それだとドロシーに察知されるおそれがあった。数分のロスはあるものの、二輪で飛ばしたほうが追いつくには有効だ。

市街地に入る直前、メーターの端に取り付けていたスマートフォンのメールが入る。親指だけで操作して内容を確認する。それを見た瞬間、ヴェロニカはISを呼ぶ。全てを見通す、黄金の眼を。

「来い、ゴールドン・アイ！」

白い制服が量子変換され、黒のISスーツへと変わっていく。それと同じ漆黒のISがヴェロニカを抱くように出現した。両肩には金色の球体がひとつずつ浮かんでいる。バイクに跨ったままのため、両腕のパーツだけを実体化している状態だ。

ヴェロニカがG・Eに搭乗すると同時に、網膜ディスプレイに『封印解除』の文字が大きく現れる。千冬たちが既に解除手続きを終えてくれたのだ。さっきのメールで知らされた通りである。あとはヴェロニカの承認だけ。

「解除承認。G・E、全てを見通せ！」

その声とともに、G・Eが大きく変化した。両肩の球体にひびが

入り、まるで卵のカラがむけるようにぱらぱらと剥がれ落ちていく。中から現れたのはまさしく眼球を模した金色の球体。さらに全身に金色のラインが出現し、簡素だった手にも金色の爪が生える。

完全開放され、黄金の眼が見開かれる。ISのハイパーセンサーの許容量を超えた情報の海がヴェロニカに流れ込む。光や音はもちろん、ネットワーク回線に強引に入り込み情報を貪る。

「見つけた」

2キロほど先の街中の監視カメラの映像にドロシーの姿を見つけた。そこらの店で調達したのか、ジーンズにTシャツという服装だ。ヴェロニカはその場所に向かうため大きくハンドルを切った。本来なら曲がれるはずのない速度でのハンドリング。そのままバイクと一緒に肉塊になってもおかしくない操縦。だが、ISがそのありえない機動を可能にした。実体化させていた腕で地面に思い切り爪を立てる。アスファルトに巨大な爪あとをのこしながら、ヴェロニカのバイクは強引に曲がってみせた。

走りながら、ヴェロニカは交通管制センターのシステムに侵入した。目的地までの全ての信号を強引に変更。一回のブレーキも必要のない、最速ルートを確保。

モンド・グロッソのような試合形式ならともかく、都市部での市街戦ならばヴェロニカの独壇場である。車から炊飯器まで、ネットワークでつながってる限り全てがG・Eの支配下に入るのだ。

「待っていてください」

アクセルを握りこみながら、ヴェロニカはそうつぶやいた。

08 (後書き)

拍手ボタン設置してみました

夜色に染まる繁華街に爆音が響く。人通りの多い町中にはあるべきではない、ドラッグレースのようなエンジン音に街がざわめいていた。

音の主は暴れ馬のような勢いで道路を疾走する鋼の二輪。猛馬は大通りに面したショッピングモール前で道を灼きながら静止した。道路には黒くタイヤの後が焼き付き、異臭を放っている。

バイクにまたがっているのは黒いISスーツを身にまとった少女。髪の色もバイクの色もまた黒い。少女はまっすぐに歩道にいる人物を見つめていた。

視線の先にいるのは赤髪の少女。背が高く、目立つ顔立ちをした白人女性だった。赤髪の少女もまたバイクの少女に視線を投げつける。

「なにしに來た。チビガキ」

「連れ戻しにきました。貴女を」

「大きなお世話だ。帰ってクソして寝ろ」

「そうもいきません。寮の門限はとくにすぎています。早く帰らないと、先生に怒られますよ」

ヴェロニカのとぼけたような物言いに、ドロシーの口元がいびつにゆがむ。

「ハッ、なら、力づくでも連れ戻してみろよ。チビガキが」

ドロシーがそう叫ぶと、首に巻いてあったチョーカーが淡く光を発した。瞬くような時間のあと、ドロシーの専用機が姿を現す。

ライトグリーンを基調とした明るいカラーリングの機体だ。左肩に黒猫のようなマークが施されている。両肩に翼とも砲座とも違うパーツが付属していて、ヴェロニカの機体と同じく情報戦のための兵装と見えた。

ドロシーのISがつつこんでくる。手には槍のような武装を持っており、突撃する騎兵のようにヴェロニカに向かってきた。ヴェロニカはとっさにバイクから飛び上がり空中で相手を受け止める。G・Eの爪が紙一重のところで槍を止めていた。

「そおいや、ISでやりあったことはなかったな」

「学年が違いますからね」

「あたしを止めたけりゃ、この『アコースティック・キャット』に勝ってからにしやがれ」

二機のISが夜空に舞う。足下の街の灯に照らされながら、十重二十重に火花を散らす。

両者ともに銃火器は使おうとしなかった。追われる身であるドロシーは流れ弾で騒ぎを大きくして、追っ手に見つかりたくないという思惑がある。ヴェロニカも流れ弾の被害を考えると、都市部での銃撃戦などできない。

刃を重ねるうちに、双方の力量が見えてきた。ISの性能は互角。両機ともに諜報の粋を集めた機体である。あとは操縦者の腕の差。これはわずかにドロシーが上回っていた。才覚の差ではない。純粹に経験の差である。二年生のドロシーとIS学園に入りたての新入生ではどうしても差がでる。もちろん、ヴェロニカとて昨日今日ISにのり始めた素人ではない。英国であらかじめ訓練を積んできているので、IS学園の平均的な二年生くらいの実力は持っている。それでも、IS学園という最先端のIS技術を学ぶ場での一年という差は大きかった。

ヴェロニカは徐々に自分のシールドエネルギーが削られていくのがわかった。このままでは行動不能にされ、ドロシーに逃げられてしまう。今のままではだめだという焦燥がこみ上げてきた。

「オラオラ、そんなもんかチビガキ！ そんなもんかヴェロニカ、そんなもんか、MI6」

「くっ……」

ドロシーの猛攻に耐えきれず、ヴェロニカは使用をためらってき

たG・Eの機能を解放した。G・Eの黄金の眼が、チリチリと音を立てて起動していく。

ドロシーの槍が突き出される。衝撃とともに、ごっそりとシールドエネルギーを奪うかに見えた。

「な……?」

ヴェロニカは紙一重で槍をよけていた。まるでそこに槍がくることがあらかじめわかっていたかのようなよけ方だ。がら空きになったドロシーの胸元に爪を突き立てる。

「くそっ」

思わぬカウンターを食らったドロシーは槍を横薙ぎに振り回した。よけられることがわかりきった攻撃。距離をとってしきり直すための一撃だ。

だが、ヴェロニカはそれもまた紙一重でかわす。最小限の動きで、踊りなれたダンスのステップを踏むように軽やかに。さしものドロシーもなにが起きたのかわからず一瞬あっけに捕られる。そこに再び爪が降りおろされる。

ドロシーが思い切り距離をとった。逃げ込むようにビルの中へに潜り込む。ヴェロニカはそれを追うことなく、虚空で相手の出方を伺った。時間にして一分ほどだろうか。空から街の明かりを見下ろしていたヴェロニカの頭上から揺らめく影が降ってきた。

電磁迷彩で姿を隠していたドロシーだった。ヴェロニカのG・Eのそれよりもさらに完璧な偽装。人間はおろか、ISの知覚すらも欺く隠れ蓑。ビルの影で姿を消し、頭上からヴェロニカをねらってきたのだ。

完全なる視覚から、姿を消しての攻撃。これは避けることも受け止めることも不可能。必殺必中の奇襲。

だが、

「そこっ!」

ヴェロニカは完璧なタイミングで振り返り、爪をたたき込んでいた。逆に奇襲をくらう形になったドロシーは槍を犠牲にすること

かろうじて直撃はまぬがれた。たたき落とされるように高層ビルの屋上へと落下する。

ヴェロニカもそれを追うようにふわりと屋上に降り立った。

「ちっ……そういうことか」

近づいていくヴェロニカに対して、ドロシーが毒づく。

「超高感度のセンサーでこっちの動きを読んでるんだな。姿消しても見つかるわけだ」

「そういうことです」

淡々と答える。

G・Eは情報戦に特化したISである。ありとあらゆる情報をかきあつめ、解析するのが主な機能だ。他の第三世代機や専用機たちに比べると地味な機体である。だが、だからといって戦闘に向いていないわけではない。

空気の揺れ、ISの駆動音、搭乗者の表情。戦場の全ての情報を統合し、あらゆる事象の先読みをする。機械式の未来予知とも言えるこの能力は、搭乗者の脳に多大な負担をかける。現在しか認識できないはずの脳に、強引に未来を視せるのだ。

今のヴェロニカでは1秒先の未来までしか予測することはできない。それも、薬品を打ち込んで無理やり脳を覚醒させてようやくだ。投入している薬はQがたいそうな名前をつけていたが、つまるところはアップー系の麻薬である。

漆黒のISが駆ける。ドロシーのISを蹴り上げ、空中でお手玉をするように連続で攻撃と打ち込み続ける。ヴェロニカらしからぬ苛烈な攻め。薬でハイになったテンションがそのまま攻撃に現れていた。

「く、そがああ！」

ドロシーが咆哮と共に小銃を取り出した。暗黙のうちに禁忌となっていた銃火器。それを出したことでヴェロニカに動揺が走る。自分に向けられた銃口を避けるべきかどうか。その判断に迷っている隙に引き金がひかれた。

一発くらいならば問題ない。ヴェロニカはそう判断して、爪でたたき落とすことにした。今のヴェロニカならば銃弾を弾くことくらいは造作もない。だが、黄金の爪が銃弾に届く前に、空中で弾丸は破裂した。破碎した弾からは小さな紙吹雪のようなものがきらきりと周辺に降り注いできた。

「グレネード？ いや、これは……」

弾の正体に気がついたときは既に遅かった。ヴェロニカは頭の中にガソリンをぶちまけたような感覚に襲われる。たまらずにその場から逃げるも、頭の芯にはまだ灼けつくような痛みが残っている。

「もう一丁！」

ドロシーが再び引き金を引く。とにかく距離をとろうとしたヴェロニカの背後で、弾は激しい音と閃光をまき散らして炸裂した。

「ああああああああっ！」

頭の中が真っ白になってヴェロニカは墜落する。電波塔の鉄骨に引っかかるような形でようやく止まった。

撃たれた弾はチャフグレネードと閃光弾だった。葉まで使ってフル回転していたヴェロニカに、さらに強烈な情報を与えることで脳をパンクさせたのだ。まだ実験段階の第三世代には欠陥がいくつもあった。

眼も耳もまともにきかない状態で、ヴェロニカはなんとか黄金の眼を停止させた。それでだいぶマシになったが、まだまともに前も見えない状態だ。

「らあっ！」

ふらふらと飛ぼうとするヴェロニカの背に、鈍い衝撃が響いてきた。ぼんやりとした視界の中でドロシーの姿が見える。

「これで、あたしの勝ちだな」

そういうドロシーのISの手には、黒いISのパーツが握られていた。ヴェロニカのG・Eの尾翼である。推進の根幹をなしているパーツで、あれがなければG・Eは『浮かぶ』ことは出来ても『飛ぶ』ことはできなくなってしまう。戦闘に置いては致命的な損傷だ

った。

「じゃあな」

ドロシーは尾翼を放り捨てると、電磁迷彩を発動させて姿を消した。

「く……そ……」

機体も、感覚も壊されたヴェロニカだったが、まだ諦めては居なかった。ISの足の部分にある収納パックからハンドガン型の注射器を取り出す。中身は黄金の眼を発動させるための興奮剤だ。

「開け、黄金の眼！」

一気に腕の血管に流しこみ、ヴェロニカは黄金の眼を発動させた。興奮剤で強引に覚醒させた脳は、焼け付きそうになりながらも情報を飲み込み始めた。

数キロ先のオフィスビルの間を這うようにして飛んでいるドロシーをすぐに見つける。

「まだ、間にあう！」

翼折れた機体で、ヴェロニカはまだそう言い切った。もはや飛ぶことはかなわず、風船のように浮かぶしかできない機体で。

ヴェロニカは電波塔から飛び降りるようにしてどこかへと向かいだした。ドロシーの向かった先ではない。まったく別の方角である。そちらに行けば、魔法の鍵でもあるかのように。

数百メートル先の路上に、それはあった。ヴェロニカがさっき乗り捨てたバイクである。倒れていた車体をISで起こしてまたがる。エンジンを入れると、暴れ馬は主の帰還をよろこぶようにいなかった。

「行きます！」

夜の街に再び爆音が鳴り響いた。

人気のなくなったオフィス街。窓明かりもまばらなビルの間をドロシーの『アコースティック・キャット』が飛んでいた。電磁迷彩

を使っているため、姿が一般人にみられることはない。

「くそ」

G・Eを無力化したものの、アコースティック・キャットもまた多大なダメージを負っていた。戦闘によって失われたエネルギーはかなりのものだ。何かがほんの少しズレていたら負けるのはドロシーだっただろう。

だが、勝ったところでドロシーにはもう行く宛はなかった。今のISのエネルギー残量ではこの島国から他国に抜けるのは不可能である。密出国をしようにも、CIAの後押しなしに抜けられるほど国境というのは甘くできていない。

できるならもっと速度を出したいが、いまのISの状態ではそれもできない。上空に出ると発見されやすくなるため、仕方なく迷彩を施して地面を這うようにして飛んでいた。

「ん？」

聞き覚えのあるエンジン音が近づいてくるのが分かった。音は少しずつ高くなり、周囲のガラス窓がびりびりと振動する。

振り返る。まるで車通りのなくなった道の中央を、漆黒のバイクが追いかけてくるのが見えた。

「……ハッ！ まあだ遊び足りないってか、チビガキ！」

「ドロシーー！」

ヴェロニカは駐車してあった車をジャンプ台にして飛び上がった。二輪の馬は宙を駆け、ヴェロニカはISの爪を出して攻撃する。黄金の爪は槍で弾かれる。ヴェロニカはそのまま道路にバイクを着地させた。

街の中を、ISとバイクが並走する。時速200キロ近い世界の中で二人は再び相まみえる。

「いい加減しつけない、てめえも」

「上司が失脚したくらいで逃げ出す貴女よりは、あきらめが悪いと思います」

槍と爪と打ち鳴らしながら言葉を交わす。

「言うねえ、クソガキ！」

ドロシーが槍を突き込んでくる。ヴェロニカはウィリーをする形でそれを避ける、そのまま前輪を落とし、槍をタイヤで引き潰した。ドロシーが急に道を変えて曲がるも、ヴェロニカはISの能力を駆使してすぐに位置を特定して追ってくる。

「つとに……しつこい！」

「諦めて、たまるか！」

ドロシーがしびれを切らして高度を上げる。警察や軍のISに見つかる危険をおかしてでも、ヴェロニカを振り払おうと言うのだ。

ヴェロニカの決断は早かった。ドロシーが高度を上げた途端、オフィスビルの壁面に向けてハンドルを切ったのだ。同時に、ISのPICを発動させる。PICはISが浮遊・飛行するためのシステムである。飛行することは今のG・Eにはできないが、浮遊することはできる。もともと、ISは宇宙空間で活動するために開発されたシステムである。PICはそのために組み込まれている機構だ。つまり、ISの活動に置いて本来『上下』という概念は不要なのだ。「ハハハハハッ！ イかれてんな、このクソガキいい！」

PICによって車体を浮かせることにより、ヴェロニカのバイクはビルの壁面を走っていた。強化ガラスの窓にタイヤの痕をつけながら重力を無視して疾走する。ISでも、バイクでも、あるものなんでも利用して目的を達成する。それがヴェロニカがMI6で叩きこまれたことだ。ISをただの道具の一つとして割り切るのは、IS至上主義のIS学園生には不可能な発想だった。

「やああああああっ！」

車体ごとぶつけるように、黄金の爪がアコースティック・キャットを切り裂いた。二機のISはそのまま地面に激突する。

粉塵を巻き上げた中心で、二機のISが停止していた。ヴェロニカは満身創痍で、ドロシーももう逃げる気力もないようだった。

「あー、結局最後も引き分けか」

「何言ってるんですか。ちゃんと止めたんですから、私の勝ちです。」

それに、最後じゃあないですよ」

「ケツ、どーせあたしはこのままCIAに引き渡されて牢獄送りだよ。毒でも埋めこまれて暗部送りかもな」

「だから、何を言ってるんですか？　IS学園が生徒を外部に引き渡すはずがないでしょう」

「ああ？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。入学のときのテキストにありましたよ。貴女にとって一番安全な場所は、IS学園なんです」

「あ……、あー、ああ！　けけけ、なるほどなあ！　開き直って居直ればなんとかなる！　一年前のテキストなんざとつくに忘れてたぜ」

「……CIAも、MI6もIS学園も、私たちにとっては道具の一つでしかないんです。向こうが私たちを利用しようとするなら、こっちも向こうを最大限利用してやりましょう。そういうしたたかさが、私たちに必要なことじゃないですか」

「かもな」

暗がりの中で生きてきた少女たち。二人は久しぶりに心のそこから笑っていた。

「くっそ……けが人にこんなピーキーなマシン運転させやがって」

「私、今まっすぐ歩けない状態なんぞー」

「あたしだって肋折れてんだよ！」

二人はかろうじて無事だったヴェロニカのバイクで学園へと向かっていた。運転しているのはドロシーである。ヴェロニカはドロシーの腰にしがみついて後ろに乗っている。

興奮剤を二発打ち、G・Eの能力をフル稼働させたヴェロニカは『情報酔い』とも言えるような状態になって平衡感覚もおぼつかない

かった。仕方なく、まだマシな状態のドロシーが運転している。どちらかのISが無事なら話は早かったのだが、二機なかよくガス欠になっていた。

「帰ったら織斑教諭にぶん殴られるでしょうねー」

「まったく。気が重い」

二人が笑いながら走っていたそのとき、ISの滑空音が聞こえてきた。音からしてすぐ近くだ。

どこのISだろうか。ヴェロニカが音の出所を探っていると、前から自嘲的な笑い声が聞こえた。

「ああ、やっぱ。そう上手くは行かねえか」

「ドロシー？」

「CIAの現行機だ。あたしを連れ戻すか、始末しにきたんだろ」

「……っ！ い、急ぎましょう。IS学園の敷地に入れば向こうは手出しできません」

ヴェロニカは焦る。学園まではあと数キロというところだった。

「無理だな。もうすぐそこまで来てる」

ドロシーがそう言ったとき、前方に一機のISが舞い降りてきた。米軍が採用している第二世代機だが、ところどころに独自の改造が施されているようだった。いかにも実用機といった都市迷彩色のカラリング。搭乗しているのは黒人の少女のようだった。

絶体絶命、だった。二人のISはもうエネルギー切れで起動もままならない。バイクで逃げようにも、あの無茶苦茶な運転はG・Eの能力があつてこそのものだ。逃走も抵抗も不可能。

ドロシーはバイクを止めると、ヴェロニカを抱きかかえて道の脇に寝かせた。

「けけ、やっぱチビは軽いな」

「ド、ドロシー……」

「じゃあな。嬉しかったぜ、追いかけてきてくれて」

立つこともままならないヴェロニカは追うことも、止めることもできない。ドロシーは笑いながらCIAのISへと向かっていく。

もう、未練はないかとも言うように。

「待って！」

ヴェロニカは立ち上がった。唇を噛み切り、痛みでかろうじて頭をはっきりさせて強引に。

「寝てろ、ヴェロニカ。……ああ、こいつは関係ない。あたしが行けば十分だろう。無関係な奴まで連れてくと、学園側がうるせえぜ」
黒人の少女は、少し迷ったあとにドロシーにISの手を伸ばした。
行くな。行かないで。連れて行かないで。ヴェロニカは子供のように叫ぶ。

ISの腕がドロシーを掴もうとした瞬間。一筋の雷光がCIAのISを襲った。夜空を切り裂くような雷光はISの右肩を一撃で貫いていた。

「IS学園の目と鼻の先でこうも好き勝手するとはいい度胸だ。どこの馬の骨かは知らんが、痛い目をみる前に帰るがいい」

黒地に血のような赤が走ったIS。白銀の髪。赤い隻眼。一年最強とも噂される独逸の代表候補生。ラウラ・ボーデヴィツヒがそこにいた。

黒人の少女はラウラに銃口を向けた。相手が第三世代だろうと所詮中身は学生と侮っているのだろう。実際、代表候補生や専用機持ちでもほとんどの者は一線級のIS乗りに遠く及ばない。一年の代表候補生が二人がかりで実技教官の乗る第二世代機に軽くあしらわれるのをヴェロニカも見たことがある。だが、ラウラ・ボーデヴィツヒは違う。彼女がまどっている空気は成績だけで選ばれた代表候補生たちとは違う、本物の軍人のそれだった。

ラウラは黒人の少女の攻撃を全てかき消していた。じゃれつく子猫をあやすような手つきだ。いくらやっても無駄だと判断したのだろう。黒人の少女の銃口はくるとラウラからドロシーへと向いた。連れ帰れないなら抹殺。命令の優先度を変えたのだ。

だが、いつまで経っても銃弾は発射されなかった。いや、黒人の少女の駆るISの動きそのものが停止していた。まるで目に見えな

い壁に阻まれているように。

「ふむ。やはり一対一ならば問題なく扱えるな」

ラウラはブツブツとつぶやきながらC I AのI Sを軽くなぎ払った。

『慣性停止結界』

ヴェロニカも以前一度だけ見たことがあるラウラの技だ。結界内の敵の動きを完全に止めてしまう反則技である。

「去れ。このまま戦って捕まるよりは撤退するほうが利口だろう」

ある程度痛めつけたあと、停止結界を解いてラウラは言った。絶対的な力の差を理解したのだろう。黒人の少女は悔しそうにラウラとドロシーを睨んでいる。やがて黒人の少女が視線を外し、飛び去ろうとしたとき。ドロシーが叫んだ。

「おい、これ持ってけ！」

ドロシーはそう叫んで何かをほうり投げた。黒人の少女があわててつかみとったそれは、ドロシーがいつも首に巻いていたチョーカーだった。そう、『アコースティック・キャット』の待機形態である。

黒人の少女は苦々しい表情でそれを見つめたあと、虚空へと飛びさっていった。三人はそれを黙って見送った。

「さて、これでこの前の借りは返したぞ」

腰が抜けたように座り込んだ二人に、ラウラが言った。

「借りだあ？」

「この前の爆弾騒ぎのときだ。貴様らを早合点して殴り飛ばしただろう」

「あ、ああ、アレか……あー。分かった」

爆弾をしかけていたのは事実なのでドロシーは曖昧に頷いた。苦笑いしながらヴェロニカの方を見る。

「貴様も、それでいいな」

「もちろんです。助かりました、ボーデヴィツヒさん」

「ラウラでいいぞ、004」

「では、ラウラで……って、は？ いや、なんで知って……」

「ふん。M I 6がどれほどのものかは知らんが、『黒ウサギ』を舐めるなよ」

ラウラはそう言うのと不敵に笑った。『黒ウサギ』とはラウラが所属しているという独逸の特殊部隊だ。以前、M I 6のデータで見たことがある。細かいことは分からなかったが、その情報網は確かなようだ。ヴェロニカもこれには苦笑するしかなかった。

「けけけ、てめえゼロゼロナンバーだったのか？ てめえみたいなヒヨッコに務まるたあ、M I 6も人材不足なんだな」

「……色々、あるんですよ。ウチにも」

ヴェロニカは道路に仰向けに寝っ転がりながら、ヴェロニカは思った。I S学園に来て、良かったと。

09 (後書き)

拍手ボタン設置してみました

8月。IS学園も夏期休暇に入っていた。生徒たちのほとんどは帰国しており、学園の寮はがらんと静まり返っている。

日本の夏というのは聞きしに勝る暑さだった。英国で生まれ育ったヴェロニカにはかなり厳しいものだ。夏期休暇にはいつてからというものの毎日电アコンのきいた図書室でぐったりしている。

諜報戦もこの時期はオフシーズンだ。護衛の対象であるセシリア・オルコットも英国に帰国しているので、ヴェロニカは久々に羽を伸ばしていた。ヴェロニカも一度英国に帰る予定がある。報告や訓練の予定ばかりで休暇という感じはしないが、久々の祖国はやはり楽しみだった。

日本での予定もあった。祖母の生家を訪ねるのだ。日本の旧家の生まれだった祖母は、厳格な両親に結婚を反対され、駆け落ち同然で英国にきた。それ以来一度も実家には帰っていないかった。だが、ヴェロニカが日本に留学したことで決心がついたらしい。『オボン』という日本の祭事に合わせて実家に行くことになった。ヴェロニカは祖母について鎌倉にあるというその旧家に行くのだ。

だが、その前にヴェロニカにはやることがあった。

「くっそ、これ一回ブレーカー落とした方が早いな。つい古いのは回収してけよなクソ共が」

「ああ、それなら私がさっきラウラに頼んでおきました」

「あいよ。ついでにニッパとつてくれ。ああ、それじゃね。そっちの小さいやつ」

「ほいほい」

ヴェロニカとドロシーは寮の部屋の盗聴器や監視カメラをまとめ排除する作業をしていた。ドロシーが電源系に仕掛けられているものをちまちまと取り外している。ヴェロニカはというとG・Eを使って細かいところを舐潰しに調べている。

ドロシー・ペトレイアスはCIAの管理下から外れることになった。CIAからは強硬に身柄を引き渡すように要請があったらしいが、学園側がすべて突っぱねた。交渉は長引いたが、ことを大きくして困るのは向こうである。最後はCIAが折れる形で幕引きとなった。だが、ドロシーの身の上が安全になったかというところでもない。いつどこで『事故』に遭うか分からない危険をはらんでいる。それでも、ドロシーは以前のようにひょうひょうと学園生活を楽しんでいた。

もちろん、ドロシー本人にお咎めがなかったわけではない。命令とはいえ、学園を危機に陥れる作戦に従事していたのだ。学園はドロシーに奉仕活動をさせることでペナルティを課した。その奉仕活動というのが、これである。

諜報員としてのスキルを活かし、学校中にある諜報の目を潰すのがドロシーの仕事だ。今は夏休みで寮に生徒がいないこともあり、点検作業と称して全室の虫取りをしているところだった。ヴェロニカは命じられていないのだが、進んでドロシーを手伝っている。

ヴェロニカには特に罰はなかった。MI6ではむしろ評判が上がったくらいだ。任務に赴く度に違う女を連れて帰ってくる男が切り札の組織である。Mはいい顔をしなかったものの、ヴェロニカが友達のために走ったことをおもしろがる声の方が大半だった。

今日の虫取りはとくに大変な日だった。学園でも1・2を争うほど諜報の目の多い場所。織斑一夏部屋を掃除する日なのだ。誰がしかけているのか分からないが、探せば探すだけ出てくる。どこからか聞きつけたのかウラまでやってきて三人がかりでやっていた。「んー？ この鏡、マジックミラーですね。たぶん裏にカメラか何か仕込んでありますね」

「お、ほんとだ。割っちゃまうか、めんどくせえ」

「片付けが面倒だからやめてください」

ヴェロニカは工具を使って洗面台の鏡をはがす。鏡の裏には予想通りカメラや計器類がこっそり組み込まれていた。出所が分かるも

のがないか適当に見ながらカメラを解体していく。マジックミラーをそのままにするか、それとも普通の鏡にするように言うべきだろうか。ヴェロニカがそんなことを考えていると、ドロシーの楽しそうな声が聞こえた。

「ヘイ！ いいもん見つけたぜ。来いよ」

「はい？」

振り返ると、ドロシーは脱衣所にあったクシを持って嬉しそうに笑っていた。絡みついている髪の毛を指でつまみニヤニヤと目を細める。

ヴェロニカはそれを見て数秒間停止したあと、深く眉間にシワを刻んだ。

「……貴女にそういう性癖があったとはしりませんでした。まあ、趣味は人それぞれですし……」

「ちっげえよボケ！」

クシで軽く頭を殴られる。殴られたあたまを押さえながらよく。

「じゃあ、そんなものなんに使うんですか」

「世界で唯一ISを使える男の髪の毛だぜ？ その手の研究機関に売り飛ばせばちょっとした小遣い稼ぎにはなるんじゃない」

「あ、あー……。なるほど」

確かに買おうというところはいくらでもあるだろう。DNAやその他の情報から、織斑一夏がなぜISを操縦できるのかを解明できれば大発見だ。無論、とくに色々なところで研究は進んでいるのだろうが、それでも貴重なデータには違いない。

「何が原因なんでしょうね。DNAを解析してわかるものなんですよ。織斑くんの子供ができたら遺伝したりするんですかね」

「あー、どうだろう。サカってるメス犬がこの学園にやいくらでもいるし、そのうち分かるんじゃない？ もう何人か出来てたりしてな、けけけ」

「あ、あの、えっと……ははは」

ヴェロニカは引きつった笑みを浮かべる。

ドロシーの下品なジョークに引いていたわけではなかった。それも十分どころかと思ったが、ヴェロニカが反応していたのはドロシーの背後にいたものだった。

「それでだ。これをあたしの昔のツテで売りさばくんだ。あたしは学園から出れねえからお前頼むな。儲けは半々でいいからよ。なに、別に誰もこまりやしねえって。世界中の研究者に貴重なサンプルを分け与える、いわば慈善事業―」

「ほほう。面白そうな話だな」

背後からやってきていたのは織斑千冬だった。仕事の進み具合を見に来たのだろう。背後にはラウラも控えている。べらべらとしやべっていたドロシーは凍りついたように動きを止めた。

「おおお織斑せんせい」

「ラブロックの手を煩わせる必要もない。私が全て買い取ってやろう。代金は……拳でいいか？」

「すみません、マジすみません」

そんなやりとりを見て、ヴェロニカはぼんやりと微笑んだ。

最近、ヴェロニカは『仮初め』という言葉が気にならなくなってきた。それが当然のことだと思うようになった。

開き直ったわけではなかった。今でも004の称号を揶揄されると気分は良くない。だが、そんな周りをきつといつか見返せる日が来ると、信じれるようになった。IS学園で学んでいけば、きっとそれが叶うと思えるようになった。

ドロシーやラウラ、千冬など、見習うべき先達がここにはたくさんいる。彼女たちと一緒に学んでいくことで、『仮初め』では無くなる日が来る。ヴェロニカはそう信じているのだ。

「なーに笑ってんだよ気持ちわるい」

ドロシーに鼻をつつかれ、ヴェロニカははっと我に返る。

「べ、べつになんでもありません」

「んじゃ、次行くぞ次。篠ノ之の部屋だ。おら、眼帯チビ。てめえも来い」

織斑一夏の部屋の掃除を終え、いそいそと帰ろうとしているラウをドロシーがひつつかむ。

「は、はなせ、貴様」

「うるせえよ一年生。先輩の言うことは聞くもんだ。ヴェロニカ！
てめえもさっさと来い」

「はいはい」

ヴェロニカは肩をすくめると、工具をまとめてドロシーたちの背を追った。

10（後書き）

終わりー。読んでくれた人ありがとうございました。

拍手ボタン設置してみました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1106w/>

インフィニット・ストラトスー仮初めの称号ー

2011年10月24日03時28分発行